
光と闇

D A R K N E S S

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光と闇

【Nコード】

N0294F

【作者名】

DARKNESS

【あらすじ】

闇はすべてを包み込む広量たる母。光はすべてを拒絶する狭量たる狂人。蠢く影を照らし出すは光。懷に隠すは闇。影を恐れ、光に生きるか。安寧を求め、闇に生きるか。命あるものは選択せねばならない。だが、選択した先に幸福があるとは限らない……。

序章：始まり（前書き）

処女作ですので、いたらないところが多々あると思いますが、ゆったりと読んでください。

序章：始まり

ここ、タール山脈に、首都ヴェインリベアへむかう一人の少年と一人の少女がいる。

「あの、ちょっと休憩しませんか？」

可愛らしい少女の声。

その声に反応して、先を進んでいた少年は立ち止まり、ゆっくりと振り返る。

その少年は、身長百七十五センチくらいの、十六歳くらいで、女性がほうっておかないようなかなりの美形。ツンツンして血のように赤い髪。サファイアのように透き通った碧眼は、無感情に、ただ美しく、鋭く、怜悧な輝きを放っている。

さらに特徴的なのは、その服装だ。

漆黒のフード付きのコートに、漆黒のズボン、漆黒のブーツ、漆黒の手袋と、見事に黒尽くしだ。

広葉樹の森の中で木漏れ日を受けるその姿は、ややもすると不気味にすら見える。

それとは対照的に、右側の腰に差している、光沢のある純白の鞘がひととき美しく映える。

精巧な装飾が施された鞘は軽く湾曲しており、片刃の剣、すなわ

ち刀を収めている。

ついでにいうと、背中にはけっこうでかい荷物を背負っており、右手にもフライパンやら包丁やらなんやらかんやら入っている荷物を持っている。

現実的な荷物を持っているという点以外では、神秘的、幻想的かつ主人公確率高めの少年だ。

少女も、十六歳くらいで、身長は百五十五センチくらい。首にかかるくらいの髪の色は紅、ぱっちりとした瞳の色は温かみのあるみずあさぎ、純白の服には刺繍が施されてある。

この服は、フルデルト教会のもので、少女が修道女であることを示している。

かなり可愛くて、清廉潔白という言葉が良く似合う、これまたヒロイン確率高めの少女だ。

少女の呼びかけに振り返った少年は、自然と見下ろした。

少年の表情は、良く言えば不服そうな表情、悪く言えば完璧な無表情。その上鋭い目つきをしている。

まるでこの世のすべてを冷眼視しているような……そんな視線が少女にむけられる。

「何度休憩するつもりだ？」

「リオンさんが速すぎるんです」

少女は、おしりが地面につかないように座っていて、後ろにひっくり返らないように、自然と前に重心を傾けている。

額からは汗がにじみ出ており、肩で息をしている。背負った荷物が重そうだ。

少女に体力がないわけではない。むしろ体力があるほうだ。

タール山脈は、首都ヴェインリベアから遠く離れた場所に位置する辺境の地なのだが、少々斜面が急な道を通らなければならない。

いや、絶対この道を通らなければならないというわけではない。

くねくねと曲がっていて登山、下山に時間がかかるが、歩いて行くのに適した正規ルート（峠）がいくつかあったのだが、リオンが

「いちいち遠回りする必要はない」

と、少女の意見を一蹴。最短ルートを通る事になった。

ただ、その最短ルートというのはつまり、ほぼ一直線に登っていくというだけだ。

なんとも単純で安直な考えだが、やはりそれは険しい道だった。

というかそこに道はなく、広葉樹の森をただひたすらまっすぐ目的地に向かって突き進むというものだった。

最初はまだ緩やかだった傾斜も、先に進めば進むほど徐々にキツ

くなってくる。

そのうえ少女が言ったようにリオンが『速すぎる』のだ。

リオンは、木々の間を抜けるように、跳躍しながら先へ進む。それはまるで鹿が山を駆けるような優雅さがあつた。

リオンは、少女から離れると一度立ち止まり、近づいてくると、また鹿のように、優雅に跳躍して先へ進むというのを繰り返す。

ただ、優雅でありながらも迷惑千万な鹿につきあわされる少女は、もうくたくただ。

リオンを待たせては悪いと思い、一生懸命ついで行くのだが、そのせいで注意力が散漫になり、足を滑らしたり、むき出しになった細い木の根につまずいて転びそうになったりと、けっこう危険な災難にあっている。

リオンは、しばらく冷たい視線を送ったあと、すぐそばにあつた木に歩み寄り、手に持っていた荷物と背負っていた荷物を、転がり落ちないように気を付けながら降ろし、木に背を向けて寄りかかる腕を組み、目をつぶる。

とりあえず、休憩を了承したようだ。

少女はゆっくりと立ち上がると、力を振り絞って歩くきだす。

リオンが寄りかかっていた木のすぐ近くにあつた木に、リオン同様に背中に背負っていた荷物を注意深く下ろして、ゆっくりと座り、木に背を向けてもたれかかる。

荷物から水筒を取り出してゴクゴクと水分補給。顔に生氣を取り戻す。

なんとなく空を見る、が木漏れ日がちょうど目に当たって首を元の位置に戻す。

時刻はまだ昼にはなっていない。太陽はまだ真上には来ておらず、少し傾いている。

広大な森の中に、点々と降り注ぐ木漏れ日は、初夏の若々しい緑と、美しい色彩のハーモニーを奏でている。

暖かな初夏の木漏れ日を受け、少女もまぶたを閉じる。

広葉樹の森から聞こえてくる風の音色、木々のざわめき、鳥のさえずり、川のせせらぎ、辺りを満たす緑の香り。

森林浴をしているようで、これだけで少女はとてもリラックスできた。

「いつまで眠っているつもりだ？」

「……眠ってたわけじゃありません」

少女はムスツとしてリオンを見上げる。

リオンは相変わらぬ冷眼視で少女を見下ろしているが、少女は不満げに異議申す。

「まだ少ししか休憩してません。ていうかこんなの休憩っていいません」

少女は頬を膨らましてぷりぷり怒っているが、リオンはまるで気にしてはいない。

リオンは少女から目を逸らして、両手をズボンのポケットに突っ込む。

「あいつら、どうする」

「？ あいつら？」

リオンは顎^{あご}である方向を示す。

その方向はリオンの左側、進路である上り坂を指している。

少女はその方向に目を向けるが、リオンがちょうど陰になって先が見えない。

そこで座ったまま身を乗り出して、もう一度目を向ける。

すると、少女は驚き、目を見開く。

視線の先にいたのは、十数人の男たちだった。

二十メートルほど離れた場所から、こちらに向かって下ってくる。

木々が邪魔してよく見えないが、その風采は、服は所々ボロボロで、動きやすさを重視した服装であると推測できる。

それぞれの手には、様々な武器を持っている。

まるで、全身に『私たちは山賊です』と、書いているようだ。

少女は慌てて立ち上がった。

「あっ」

そのときに両手で持っていた、水筒を落としてしまった。

水筒は、少し堅い土の上を転がるように、跳ねるように落ちてゆく。

そのまま落ちていってしまうと思ったものの、幸い飛び出した木の根にぶつかって、十メートルほど下った所で停止した。

それを見ていた少女は、また慌ててリオンに駆け寄る。

リオンの横に隠れるように寄り添って、リオンの服の裾をしっかりと掴んで、目で『逃げよう』と、訴えかける。

少女の手は恐怖で震えているが、リオンは相変わらず両手をズボンのポケットに入れたままで、悠然と構えている。まるで逃げようという意志を感じられない。

そうこうしているうちに、山賊たちは、五メートルほど近くにまで来ていた。

リオンは、自分の左側に固まっている山賊たちを、さして興味無

さそうに、一応全体の構成をみた。

山賊たちの数は二十人。それら全員に共通しているのは、筋肉隆々で、武器を持っていることだ。

武器は、ほとんどが棍棒だが、剣を持っているものも数人いて、一人だけ立派な斧を持っている。おそらくそいつがリーダーだろう。

リオンは、一通り全体の構成を見ると、本当に興味が失せたというように、山賊たちから目を逸らし、首を元の位置に戻す。

山賊たちは、リオンたちを取り囲むように移動し、リオンたちを中心に、半径五メートルほどの山賊たちの円ができた。

「よお、こんなところで何をしているだ」

山賊たちのリーダーが話しかけてきた。

リオンは、自分の左側にいるリーダーを横目に見る。

その男はにやにや笑っていて、かなりの不快感を与えてくる。ほかの奴らも似たような笑みを浮かべている。

ただ、脅えている少女にとっては、更なる恐怖を与えるものであり、リオンにとっては、気色悪い笑い方ではなかった。

リオンは目を逸らし、いつも通りの、冷ややかな無表情でリーダーの問いに答える。

「お前たちの問いに答えてやる義理はない」

リーダーから先ほどまで浮かべていた、不快感を与えつつも気色悪い笑みが消え失せ、かわりに眉根をひそめて不快感をあらわにした。

「おい、お前いま自分がどういう状況か、わかっているのか？」

「十分理解しているつもりだが」

リオンの態度はリーダーを更にイラだたせた。

山賊たちは、獲物を狩る前に、恐怖に引きつった顔が見たかったのだ。

その点で言えば、少女の脅えきった表情は、山賊たちを満足させるものだった。

だがリオンの態度は一切の恐れがなく、それどころか、自分たちを見下して、なめきっているように見えた。

そもそもリオンは、山賊たちをまともに相手にしていない。

目を合わせず、ただ真正面を向いて、虚空を見つめているのが、いい証拠だ。

そのことが、リーダーをよりイラだたせる。

リーダーは、顔を歪ませ、声だけは冷静に続ける。

「どうもお前は馬鹿らしいな。自分の状況がわかっていながらそん

な」

「臭いな」

「ハア？」

リオンは自分の小手で、鼻を覆った。

「臭いんだよ、お前ら。鼻が曲がる」

確かに、山賊たちからは、鼻を突くような臭いが漂っている。

少女は恐怖のためか、そのことに気づいていなかったが、リオンの言葉によって、嗅覚が戻った。

うっ、確かにそう言われると……

少女は、リオンのように、あからさまに鼻を覆ったりしなかったが、かわりにリオンの服に顔をうずくめることによって、臭いから逃れた。

山賊たちは、怒りで震えている。

「お前、あまり俺たちを怒らせるなよ。どうせ死ぬなら、ひと思いに死にたいだろう？」

「死？ 俺を殺そうと言うのか？ 愚かな。いや、もはや哀れだな。自らがそんなに強いと思っているのか？ 醜男ぶおとこの集まりな上に、馬鹿ばかりか。お前たちの未来に哀悼の意を表そう」

リオンの淡々とした毒舌は、山賊たちの怒髪天を衝いた。

山賊たちから、激しい怒号と罵声が飛び交い、一斉に武器を構える。

少女は脅えて、身を縮こませ、リオンに食い込むんじゃないかと思っくらい、顔をうずくめる。

リーダーは、とうとう声を荒げて言った。

「ふざけるな！ 愚かなのはお前だろう！ ひと思いに殺ってやろうと思っていたが、予定変更だ。お前はジワジワいたぶって殺してやる！ その女は奴隷としてこき使ってやる」

「ふえっ」

いきなり、引き合いに出された少女は、ビクリして、顔をガバツと上げて、リーダーを見る。

リーダーは怒りで激しく顔を歪めていたが、少女と目が合うと、いきなり例の気色悪い笑みを浮かべ、値踏みするように、舐め回すように少女の全身をジロジロ見る。

「ほう、良く見ればなかなかの上玉じゃないか。お前は、俺のおもちにしようかな」

「ええ」

リーダーの、おもちゃという言い方がやたら生々しい。

少女は困惑してどきまぎしている。

恐らくリーダーが何を考えているのか、見当がついていないのだろう。

修道女だからそういうのには疎いのだろうか？

「ちょっと待ってくださいえ」

今までずっと黙っていた山賊たちの中から、一人が口を挟む。

「お頭、あつしたちにも恵んでくださいえ」

「心配するな。俺が飽きたら、お前たちに恵んでやる」

「そりゃありがてえ」

山賊たち全員が、にやにやと笑っている。

構えていた武器は、ただ持っているだけという状態になった。

心はすでに、少女とある行為に浸っているのだろう。

少女は、更に強くリオンの裾を掴み、潤んだ目でリオンを見つめる。今にも泣き出しそうだ。

リオンは少女を一瞥した。

「手を離せ」

「えっ？」

少女は戸惑った様子だったが、恐る恐る手を離す。

リオンは、両手をポケットから出して、寄りかかっていた木から離れる。

「下卑^{げひ}た奴らだ。不愉快だ。その下品な笑いをやめろ」

さっきまでにやにや笑っていた山賊たちから、気色悪い笑みが消え、みるみるうちに怒りの色をあらわにする。

山賊たちからリオンに、殺意と敵愾心のこもった視線が注がれる。

「お頭、あつしはもう我慢できませんぜ。早く殺っちまいてえんですが」

「そうだな。さっさと殺っちまうか」

山賊たちは、すでに襲いかかる準備は完了。後はリーダーの号令があれば、すぐにでも襲いかかってくるだろう。

リオンは面倒くさそうにリーダーの方を向き、感情が読み取りづらいその目で、リーダーの目を見る。というよりは、焦点を合わせた、といった方がいいだろう。

「なあ、お前」

「何だ？ 今更命乞いか？」

「絶望を知っているか？」

「ハア？」

リオンは、木々に隠れてよく見えない天に両手を伸ばし、仰ぎ見る。

「絶望とは全ての墮落。全ての破滅。全ての終焉。美しき闇。悲しき希望。魅惑的な奈落。甘美な誘惑。」

「何わけのわかんねーことを」

「絶望を見てみたくなはないか」

リオンは両手を下ろし、再びリーダーに焦点を合わせる。

そしてリーダーに向かって、手のひらを上にして、左手を伸ばす。

それはあたかも、ダンスのパートナーに手を差し出すように。

「残念だがお前に真の絶望を見せることはできない。だが、その一端を見せることは可能だ」

「な、何だ、お前。頭おかしいんじゃないか」

「お頭！ こんな奴さっさと殺っちまいましょう！」

我慢できずに、山賊の一人が叫んだ。

すると、リオンは一瞬、冷笑ともいえる不敵な笑みを浮かべた。

それは、一秒にも満たないほど短いものだった。

だがそれは、見た者をゾッとさせるような、おぞましい笑みだった。

その場にいた、リオンの笑みを見た者は、背筋に寒気が走った。

そして、それを最も強く感じたのはリーダーだった。

リーダーは、背筋に寒気と電気が同時に走った。

心臓が破裂するんじゃないかと思うほど、早鐘のごとく鼓動をうつ。

頭の中に警鐘が鳴り響く。

こいつは危険だ。今すぐに離れろ、と。

リオンは、鼻を鳴らして、ゆっくりと左手を下ろす。

「フツ、お前たちには理解できないことだったか。まあいい。理解する必要は無い。お前たちはここで朽ちる」

凍てついた眼光がリーダーを貫く。

放たれた殺気が、辺りの空気を支配する。

バタバタと、鳥の慌ただしく飛び立つ音が、あちこちから聞こえる。

瞬く間に、糸を限界まで伸ばしたかのような、張り詰めた緊張感が辺りに漂う。

山賊たち全員が、顔を緊張で強張らせる。

山賊たちは今、死の淵に立たされたような緊張感と恐怖、絶望感を味わっている。

先ほどの威勢は跡形もなく消え去り、恐怖に戦慄^{わなな}き、数人が後退りし、今にも逃げ出しそうな者もいる。

だが逃げられない。

リオンの一挙手一投足が気になって、とても顔を背けられない。

リオンの微かな仕草や、まばたきですら恐怖を煽る。

山賊たちは明らかにリオンを畏怖している。

だが、この状況で一番悲惨なのは、リオンの眼光をまともに受けているリーダーだろう。

リーダーは逃げ出すこともできず、戦慄することもできず、目を逸らすこともできず、まばたきすることもできず、息をすることすらもできず、全ての自由が奪われた。

この山賊たちは、藪をつついたがために、死神を呼び出してしまったのだ。

リオンは刀の柄に手を伸ばし、抜き放とうとした。

「ダメです!」

リオンのすぐそばから、聞こえてきた声。

それは少女の声だった。

リオンは少女を見下ろす。

少女はリオンの服の裾をギュッと掴み、リオンの見上げる。

リオンの目を見た瞬間、ビクッと震えた。

リオンはとっさに目を逸らし、再びリーダーに目を向ける。

リオンの放つ殺氣の一端に触れて、少女は戦慄いた。

それでも必死に続ける。

「ダメです。殺してはいけません」

リオンにしか届かないほどの、小さな声。

だが、決然とした意志がこもった声。

少女の震えが裾からリオンに伝わる。

「……気絶させる。それくらいならいいだろう?」

「……はい」

刀の柄から手を離す。

凍てついた眼光は、普段の冷たい目に変わる。

辺りを満たしていた殺気が消えると同時に、張り詰めていた空気が消え去った。

しかし、それと同時に山賊たちの緊張の糸が切れてしまった。

リーダーは泡を吹き、白目になってうつむけに倒れる。

死の淵から解放された残りの山賊たちは、二つの種類に分かれた。

弾かれたように逃げ出す者と、狂乱して襲いかかってくる者。

その二つの共通点は、悲鳴と絶叫を同時に発していることだ。

「うわあああああ！！！」

リオンは瞬時に臨戦態勢に移る。

そして、一方的な戦闘が始まった。

序章：始まり（後書き）

♪ 迫り来るしょうげ〜き〜へ〜と〜、恐れずに、と〜び〜こ〜み、
し〜んじ〜つ〜が〜♪

あつ（・o・）どうも、L・Arc〜en〜Cielを神と崇める
DARKNESSです。

曲は『DRINK IT DOWN』です。

少しでも楽しんで読んでくださっていたら、大変嬉しいです（^
^）ノ

第一章：1 退屈（前書き）

自分自身思いもよらず、意外と早く更新出来ました。
さて、今回はリオン達とはまた違う人物に焦点をあてています。

第一章：1 退屈

ここはタール山脈の麓ふもとに位置するセインバーク領地の、セインバーク城。

その裏庭に、一人の青年がいる。

「なんか面しれ〜ことないかな〜」

退屈そうに、座り込んで壁にもたれている青年が呟いた。

青年は、二十歳前半くらいで、身長百八十センチは軽くあり、体躯も良い。

目を見張るような金色の髪は、肩と腰の中間くらいまである。

エメラルドのような緑色の瞳。

腰の左側に差した純銀製のロングソードが良く似合う。

青年は、とにかく全身から脱力感が漂い、退屈であることをアピールしている。

だからといって、それを見ている人間がいなければ何の意味もない。

まあ、見ている人間がいたとしても、青年の退屈を解消してくれるとは限らないが。

青年は、思いっきり欠伸あくびをすると勢いよく立ち上がった。

「だああああ、暇だ！ 退屈だ！ どうしてこつても平和なんだ！」

「うるさいぞ！ 静かにしないか！」

突如として頭上から声が響いてきた。

壁の方を向いて見上げると、ちょうど自分の真上にある三階の窓から、顔を覗かせる中年の男がいた。

その男はボサボサ頭の茶髪で、いたずらっぽくニヤニヤ笑っている。

「んなこと言っただけよ。暇で暇で死にそうなんだよ。何か面白いことないのか？」

「ほほう、警備兵隊長どのが暇で死にそうなのか。この平和に感謝して、一緒に黙祷を捧げようじゃないか」

「……嫌みなこと言うなよブロード」

「そう思うなら少しは鍛錬でもしたらどうだ？ お前の後ろに練兵場があるのは気のせいかな？」

青年は後ろを振り返る。

朝早いめか、人氣がなく閑散とした練兵場は、どこかもの悲しい雰囲気がある。

青年は苦笑して、再びブロードを見上げる。

「だって部下が誰一人鍛錬してないんだぜ。バカバカしくないか？」

「ほう、部下というのは上官の背中を見て育つものだと思っていたが、俺の間違いだったらしいな」

青年は、これ以上会話を続けると、自分が不利になる一方だと悟り、裏庭から離れる。

それを見ていたブロードが、慌てて叫ぶ。

「あつ！ おい！ どこへ行くつもりだ！ デイプロ！」

「うつせーな。ちょっと散歩してくるだけだよ！」

それだけ言うと、さっさと歩いて行ってしまった。

デイプロは、セインバーグ領地の大通りをゆったりとした足取りで、歩いている。

ただ田舎領地のためか、大通りというよりただっ広い道といったほうがいいのかも知らない。

大通りの両側には、ぽつりぽつりと家々が並んでいる。

爽やかな風がデイプロの髪をなびかせ、朝の暖かな光が金髪を輝

かせる。

しかしその顔は、どこか憂鬱そうに見える。

相変わらず揉め事もなく平和な領地に、不謹慎にも失望しながら歩を進める。

そもそもこんな朝早い時間に、揉め事があつたりするはずがない。通りすがりにすれ違う人物も少なく、牛乳を取りに行っていると思われる子供が通りかかったり、牛乳を抱えながら帰路に着く子供とすれ違ったりするくらいだ。

うつむき加減に嘆息をつきながら歩いていると、果物を売っている露店を見つけた。

先ほどまで嘆息をついていた人間とは思えないほど嬉々として、軽く足を弾ませながら、引き寄せられるように露店の前まで歩いていく。

「おつ、ディプロじゃないか。めずらしいな、こんな朝早くに」

露店の店主である中年の男性が、親しげに話しかけてきた。

「ああ、なんか目が覚めちまってな、暇だからぶらぶらしてんだ」
そう言いながら、赤々としたリングコに手を伸ばし、上にぽーんと投げてはつかむ動作を繰り返しながらたずねる。

「これ、いくらだ？」

「銅貨三枚」

ディプロは懷から銅貨三枚取り出すと、店主に手渡す。

それを受け取った店主は微笑みながらハンカチを取り出した。

「リンゴ、拭くものが必要だろう?」

「さすが、気が利くね」

ハンカチを受け取ったディプロは、大雑把にリンゴを拭く。

ハンカチを店主に返すと一言「ありがとうな」と言つて露店から離れ、再び大通りを歩き出す。

いつの間にか活気付いていた大通りを、リンゴをかじりながら歩いていると、人だかりが目についた。

人だかりは、<旅人の安らぎ>という宿の裏庭の路地に集まっている。

もしかしたら退屈しのぎになるかもしれないと思い、興味本位で近づく。

食べかけのリンゴを片手に持ちながら、人ごみを掻き分ける。

「あゝごめんよ。ちょっとどいてくれる? はゝい通りますよ。どいてどいて。あっ、足踏んじやった? 悪い悪い。……よつと」

そんなこんなでようやく人ごみを脱出。

そして目に飛び込んできたのは、異常なほど真っ黒い少年が、シ
ョートソードを振るって仮想の敵と戦っている姿だった。

腰の右側には、今まで見たことのない特徴的な剣が差しており、
腰の左側には、ショートソードを収めるための鞘が差してある。

血のように赤い髪。冷たく輝く青い瞳。無表情な顔。

それなりの群集に見られているのに、まったくというほど何の感
情も見受けられない。

ただ淡々と、黙々と仮想の敵と戦っている。

無表情な少年を見ていと、鍛錬というよりは一種の機械的な作業
のようにも見える。

だが、その剣を振るう姿はとても美しく、品位が漂っている。

それほどまでに洗練された、華麗な剣技だった。

少年は、その美貌で小さな女の子からおばさんまで虜にし、その
剣技で小さな男の子からおじさんまで魅了した。

ディプロの耳に、様々な感嘆の声が聞こえてくる。

「すごいな。剣術に詳しいわけじゃないが、本当に美しいな。もし
かしてどこかの貴族何じゃないか。お忍びで旅をしているとか」

「いや、お忍びだったらあんな目立つ格好しないだろ」

そんな言葉を聞いているうちに、胸のうちに沸き立つ闘争心を抑えられなくなってきた。

そもそもあんな剣技を見せ付けられて、黙っていられるわけがなかった。

警備兵隊長として、自分自身の栄誉のため、そして何よりも、戦士としての自覚が戦うことを望んでいる。

暇つぶしで散歩して良かったと心の底から思い、喜びに顔をほころばせる。

急いで食べかけのリンゴを食べると、残った芯をぽんと捨てた。

そして少年に声をかける。

第一章：1 退屈（後書き）

♪ みあぐげたぐならぐ、夜空を切りさぐいてぐ
ども、今回も L・Arc〜en〜Ciel です。

曲は『NEXUS 4』です。

大好きなんです。

すいません¥（――）

いかがでしたか？

楽しんでくれたら幸いです。

多分、次で少女の名前が出ると思います（多分）。

第一章：2 月に照らされて（前書き）

4日ばかりで書き上げました。

しんどいです（TΔT）

今回で少女の名前がでてきます。

第一章：2 月に照らされて

「やっと着きましたね」

少女はほつとした面持ちで呟く。

リオンはそれには答えず、それ程まぶしさを感ぜない、沈み行く夕陽を見つめる。

リオンたちは、タール山脈の麓にあるセインバーグ領地の入り口付近にいる。

山賊たちに襲われてから三日がたっていた。

あの後、襲い来る山賊たちをすべて返り討ちにしたリオンは『山賊たちが人殺しの道具を持っているのは危険だ』という大義名分の下、すべての棍棒を真つ二つに切ることで使用不可にし、リーダーが使っていた斧と、ショートソード一本を強奪。

ちなみに後のことを考え、山賊たちの気絶時間があまり長くないように、力をコントロールして打撃を加えていた。

あまり気絶時間が長いと、気絶している間に魔物に襲われるという非運を招くかもしれないからだ。

装備が追加されたリオンは、現在腰の左側にショートソードを差し、左手に斧を持っている。

腰の右側に差した刀と、右手に持った荷物、背負った荷物を合わ

せて完全装備だ。

リオンは、少しの間夕陽を眺めていたが、眼前にせまったセイン
バーグ領地に目を向ける。

「直に日^{じき}が落ちる、早く行くぞ。暗くなってから宿を探するのは面倒
だ」

すたすたと歩き出すリオン。

少女もそれについていく。

領地に入り、大通りをリオンと一緒に歩いて宿を探していた少女
はあることに気づく。

道行く人々が、自分たちに好奇の視線を送っている。

正確にはリオンに、だ。

リオンの見事な黒付くしの服装と、完全装備はとてつもなく目立
つ。

人々の好奇心をくすぐるのも当然だろう。

だが、真実はそれだけではない。

本来なら、この目立つ格好を見てから、顔を見るとというのが普通
だが、人々の反応は逆だった。

つまりリオンの顔を見てから、完全装備に目を向けていたのだ。

リオンの端整な顔立ちは、男ですら一瞬魅了するものだが、夕陽のオレンジ色の光は、血のように赤い髪をよりいっそう色濃く見せ、青く輝く瞳に混ざり合い、よりいっそう美しく、冷たく感じさせる。

夕陽には魔力があるというが、その恩恵を受けたリオンは、神秘的な雰囲気をまとい、絶大な破壊力を生み出している。

女性にいたっては、リオンの完全装備がまったく目に入っておらず、うっとりで見入っている。

そして、一緒にいる少女に嫉妬の視線を投げかける。

少女は、女の子たちの射抜かれそうな痛い視線を受けながら、こそこそとリオンの後についていく。

しばらくして 旅人の安らぎ という二階建ての木造の宿屋が見つかった。

太陽は沈む寸前で、淡い茜色の空が、夜の帳が開くのを告げようとしている。

リオンはゆっくりと扉を押した。

ギイツという音がして扉が開く。

お世辞にも広いとはいえないホールには、円形のテーブルが五つ置いてあり、それぞれに燭台が一本ずつと、四つずつ椅子が置いてある。

酔っ払って上機嫌になっている数人の中年男性の相手をしていた、ちよつと小太りの中年の女主人（と思われる）が、扉が開く音を聞き、目を向けた。

女主人は、リオンの奇怪な服装と完全装備を見ても、特に何の反応もせず、人の良さそうな笑みを浮かべ、リオンたちに歩み寄る。

「旅人さんが来るなんて珍しいね。その服を着ているということはフルデルト教会の修道女だね」

「はい、フリージアと申します。こちらは同行者のリオンさんです」

「あたしは、ミレイア。この宿の主人だよ。ここには布教しにきたのかい？」

「そうです。一週間ほどここに滞在する予定です」

「そうかい。何もないところだけどゆつくりしていくといいよ。できる限りのおもてなしをさせてもらうからね」

「ありがとうございます」

フリージアは、ぺこりと頭下げた。

主人が客をもてなすのは考えてみれば当然のことなのだが、素直に感謝するところがとても彼女らしい。

ミレイアはそんな彼女を見て、微笑みながら言う。

「食事にするかい？ それとも風呂にするかい？ あっ、その前に

その荷物を置いてこないとね。部屋に案内するよ。ついておいで」

「代金は前払いじゃないのですか？」

「まずは、その荷物を置きにいつてからでも遅くないだろう」

ミレイアは二階に続く階段に向かって歩きだす。

リオンとフリージアもそれに続く。

ギシギシと軋む階段を上がっていると、ミレイアがいたずらっぽく言う。

「部屋は共同でいいね。若い二人が別々の部屋で寝るなんてかわいそうだからね」

「ええっ！ あっ、あのっ！ わっ！ 私は」

「部屋は別々にしてくれ」

会話終了。

フリージアの顔は真っ赤になっていたが、リオンの言葉に頬を膨らます。

心の中で、不満の声を漏らした。

別に、そんなにはつきり言わなくてもいいじゃないですか

リオンと一緒に部屋がよかったわけではなく、単にはつきり言わ

れたのがちょっとショックだったただけだ。

少しいじけたように呟いた。

「……リオンさん、もっと言葉をオブラートに包んでください」

リオンはきつぱりそれを無視した。

「ふうっ、さっぱりした」

ひさしぶりの風呂に入ったフリージアは、ご機嫌だ。

頬は赤く火照り、満面の笑みを浮かべている。

壁にかけられた燭台の光は、まだ乾ききっていない髪についた小さな水滴に反射し、きらきらと輝かせる。

ホールに向かって廊下を歩いていたフリージアは、ホールがやけに騒がしいことに気づいた。

ホールを見た瞬間、思わず苦笑してしまった。

狭いホールに人があふれかえっている。

冗談じゃない、本当に二十数人は確実にいる。

テーブルを囲むように密集した中年男性たち。

ホールに響く酔っ払いたちの笑い声。

すべてのテーブルに山のように積まれた料理が、みるみるうちにたいらげられてゆく。

「唐揚げがなくなったぞ！」

「今持つて行くよ！」

「こっちもなくなったぞ！」

「フレス！ そっちに料理持つて行っておくれ！」

「ビールおかわり！」

「こっちも頼む！」

「わかったからちよつと待ちな！」

戦場だ。まごうことなき戦場だ。

注文の受け答えは叫び声に等しく、ミレイアと数人の下男が慌ただしく厨房とホールを行き来する。

突然と突っ立っていたフリージアは我に返り、ミレイアを呼ぼうと声を上げる。

「あの！ すいません！」

フリージアにしては、大きく声を出せたほうだったが、酔っ払いたちの叫び声にあえなくかき消された。

ちよつと落ち込んだフリージアは、あきらめてうつむきながら階段を目指す。

そんな彼女を見つけたミレイアは、手に持っていた料理を下男に任せ（押し付け）て、酔っ払いたちを押し分けながら、突き進む。

ミレイアがこちらに近づいてくるのを視界の隅にとらえ、立ち止まり、顔を上げて目を向ける。

酔っ払いたちの間を抜けるのに、四苦八苦している様子だったが、何とかフリージアのもとまでたどり着いた。

「驚かせてすまなかったね。この時間になるといつもこうなんだよ」「いつも、ですか？」

「ああ、こんな田舎に旅人が来るのは珍しいことなんだよ。だから普段は酒場として営業しているのさ」

フリージアは心の中で納得した。

ミレイアがリオンたちに初めて会ったときの第一声が「旅人さんが来るなんて珍しいね」だったのだどうにも引つかかっていたのだ。

宿泊客が来るのを珍しいというような宿が、どうやって成り立っていたのか疑問だったのだが、ようやく理解できた。

フリージアは感心したように言う。

「それにしても大繁盛ですね」

客（酔っ払い）でうめつくされたホールを見渡していると、一人の男と目があつた。

その男は、にやつと笑って大声で声をかける。

「お嬢ちゃん、こっちに来て一緒に飲まないか？」

「えっ、あの、わたしは」

「こら！ ブロード！ 修道女に酒なんか勧めるんじゃないよ！」

ブロードは豪快に笑い声を上げて、自分たちの話に戻っていった。

ミレイアは申し訳なさそうに言う。

「ごめんなさいね、あんなやつらばかりで」

「いえ、いつも笑い声が絶えないというのはすばらしいことですから」

「そう言ってもらえるとうれしいね。ここにいるやつらは気さくでいいやつばかりだから、それだけは保証するよ。ろくでなしばかりだけどね」

ミレイアは、ハハハッと笑った。

フリージアは苦笑しながらそれを聞いていた。

少しの間笑っていたミレイアは、すっかり忘れていたことを思い出した。

「そつえば夕食がまだだったね。何が食べたい？」

フリージアは困った、というふうに、何か言いたそうにあたふたした。

それを不思議そうに見ていたミレイアは、フリージアが何を言わんとしているかわかった。

「料理は部屋に持って行くから心配いらないよ」

フリージアは正直ほっとした。

彼女に、この戦場に果敢に割り込めるほどの度胸はなかったから。

フリージアは、スープやサラダといった、栄養バランスを重視したものを注文した。

ミレイアはそれを聞くと、勇猛に戦場へと戻っていった。

フリージアは階段を上って廊下にでた。

廊下の壁には、複数ある部屋の扉を挟むように燭台が掛けられており、淡い光が廊下を照らしだす。

廊下を渡って、リオンの部屋の前に立った。

扉を二回ノックすると、中から「入れ」という声がした。

扉を開けたフリージアが見たものは、とても言葉では言い表せないものだった。

月明かりに照らされた部屋。

開けられた窓から涼しげな風が部屋に入り込み、フリージアに纏われるように通り抜け、廊下を渡って行く。

フリージアの正面にいるリオンは、窓際に体を横に向けて、足を組んで椅子に座り、右肘を窓枠について頬杖をついている。

夜空を見上げるリオンを月が照らす。

月に照らされたりオンはどこか神秘的で、表情こそいつもと変わらないものの、物思いにふけっているように見える。

ただ、詩になりそうなほど美しい画なのに、なぜか物悲しさを感じさせる。

フリージアは静かに扉を閉めて、まっすぐにリオンに歩み寄る。

途中で壁に立てかけられた斧と、すでに空っぽになった皿と青銅のコップが、小さな円形のテーブルの上に置いてあるのが見えた。

「何を見ていたのですか？」

リオンは一瞥すると、再び夜空に視線を移す。

「月を見ていた」

フリージアも月を見上げる。

空高くで、青く輝く半分にかけたイルミスと、それより一回り大きく、赤く輝く満月のエイリスが、淡い光を放っている。

宝石を散りばめたような星空に浮かぶ二つの月は、すべての生命を見守っているような、穏やかな光で世界を照らしている。

感慨にふけっていたフリージアはポツリと呟く。

「きれいですね。すいこまれそう……」

「綺麗……そうだな。綺麗なのかもめないな」

二人の間に流れる穏やかな時間。

隔絶された二人だけの世界。

フリージアは、とても居心地が良かった。

いつまでもこんな時間が続けばいいのに。とさえ思っほに。

だが、居心地のいい時間は長くは続かないものだ。

扉をノックする音が、フリージアを現実の世界に引き戻す。

扉の向こうから声がする。

「すまないね、ミレイアだよ。入ってもいいかい？」

リオンはそれに答えるでも拒否するわけでもなく、ただ月を見て押し黙っている。

仕方なくフリージアが答える。

「どうぞ」

扉が開き、木製のトレイを持ったミレイアが、フリージアを見つめる。

「やっぱりこっちにいたのかい。料理は部屋に運んでおいたよ」

「ありがとうございます」

そしてぺこりと頭を下げる。本当に馬鹿丁寧だ。

ミレイアは、テーブルの上にある、空になった食器を見つけた。

「食器はさげておくよ。追加注文はあるかい？」

リオンは見向きもせず、素っ気なく「ない」と答えた。

ミレイアは、食器をトレイの上に載せて「しつれいしたね」と言
って部屋を出て、扉を閉めた。

フリージアは、リオンを見つめる。

リオンは、先ほどまでとなんら変わりなく、月を見ている。

ただ一つ違うのは、リオンが纏っていた特殊な雰囲気、きれいさっぱりなくなったことだ。

そこにはリオンがいるだけだ。他には何も無い空虚な空間。

フリージアは、なぜか寂しさを覚えた。

自分はさっきリオンの心に触れていたのではないか、という思いが胸中を駆け巡る。

だが、気付くのが遅すぎた。

もうリオンの心を推し量ることは出来ない。

後悔の波が押し寄せ、自責の念にかられる。

リオンに見えないように、ふがいない自分に小さくため息をつく。

フリージアは、扉の前まで歩いていくと、リオンのほうに向き直る。

「私は、部屋に戻りますね」

自分自身に失望したフリージアは、それを悟られまいと、普段より声を明るめにしていた。

「おやすみなさい」

リオンは答えなかった。

第一章・2 月に照らされて（後書き）

♪いつでも、き〜み〜の〜、笑顔に、ゆ〜れ〜て♪

L・Arc〜en〜Ciel

曲は

「flower」です。

ほかのアーティストもそろそろだそうかと思ってます。

えっ、どうでもいいって!?

そんなこと言わずに、付き合ってくださいよ。

さて、ようやくでてきた少女の名前ですが、由来は花の名前です。

第一章：3 出会いは……

朝、フリージアは目が覚めた。

ベッドの上に仰向けになっていて、首だけ横に向けて、とろんとした目で部屋を見やる。

朝日が窓を通して降り注ぎ、部屋全体にはつきりとした陰影が浮かんでいる。

朝日の斜影角度を見る限り、ずいぶん朝早いということが予想できる。

フリージアは体を起こした。

とたん、体中に鈍痛が走り、小さく悲鳴を上げる。

なんてことない、ただの筋肉痛だ。

リオンの無茶苦茶な登山と下山につき合わされれば誰だってこうなる。

実は昨日まで確かに筋肉痛ではあった。

それはさほど気になるほどの痛みではなかったのだが、一晩ベッドでぐっすり眠って緊張の糸が切れたのか、現在は体中が悲鳴を上げている。

少しの間呻吟していたが、ゆっくりとできるだけ体が痛くならな

いように、ベッドから立ち上がる。

外の空気を吸おうとして、窓を開けに行く。

筋肉痛のせいではないぶんぎこない歩き方になっているものの、何とか窓の元までたどり着いた。

暖かな日の光に包まれながら窓を開けると、爽やかな風とともに、新鮮な朝のすがすがしい空気が流れ込んできた。

空は雲ひとつなく快晴で、鳥のさえずりが平和な朝の訪れを祝福しているようだ。

フリージアは、深く深呼吸をすると脳が一発で覚醒した（その前に、筋肉痛でずいぶん覚醒していたけど）。

ふと視線を下に向けると、そこにはリオンがいた。

裏庭で、虚空に向かって剣を振るリオン。

その動きに無駄が見られず、全方向に隙がない。

リオンの流れるような剣の舞は、剣に疎いフリージアが見ても、とても美しく見える。

リオンにばかり気を取られて気づくのが遅かったが、ずいぶん見物人がある。

見物人は、ときおり拍手をしたり、声援を送ったりして楽しそうだ。

しかしリオンはそんなことには無関心に、ただ剣を振るっている。しばらくリオンを眺めていたフリージアは、もっと間近で見ようと思い、顔を洗ってから部屋を出た。

筋肉痛のせいで四苦八苦しなから廊下を渡り、壁に手をつきながら階段を下りる。

ホールは二階の部屋と違って陽光があまり差し込んでおらず、少し薄暗い。

薄暗いホールの中に、テーブルを拭いているミレイアの姿が目についた。

ミレイアもフリージアを見つけたが、彼女のつらそうな姿を見るやいなや顔色を変えて、雑巾を置いて駆け寄った。

フリージアは階段の三段目にいたので、自然と見上げながらミレイアは心底心配そうにたずねる。

「どうしたんだい？ 具合でも悪いのかい？ 薬とってこようか？」

フリージアは、ぜんぜん平気という風に微笑みながら言う。

「大丈夫です。ただの筋肉痛ですから」

「筋肉痛って、ただの筋肉痛でそんなになるのかい？」

「なりますよ。リオンさんと一緒にいれば誰だって」

フリージアは、意味深に言うと、タール山脈を越える道中を思い出して苦笑したあと、ため息を漏らす。

そんなフリージアを訝しげに見ていたミレイアは、心痛を察したようだ。

「何があったかわからないけど、大変な思いをしてきたんだね」

「わかってくれますか」

フリージアの瞳が潤んでいる。よほどリオンのペースにつき合わされたのがきつかったのだろう。

ミレイアは穏やかな微笑を浮かべた。

「あの子なら裏庭にいるよ。呼んでこようか？」

「いえ、大丈夫です。部屋から見ましたので、今から行くところです」

「そうかい。あの廊下を進んでいけば裏庭に出られるよ」

「わかりました」

フリージアは階段を下りて、ギクシャクしながら廊下を目指す。

ミレイアは、フリージアの後姿を心配そうに眺めていたが、何ができるわけでもなく、仕方なくテーブルを拭きに戻った。

規則正しく間隔をあけた燭台が壁に掛けられた廊下を渡って扉を開けると、リオンが裏庭の真ん中あたりで剣を振るっていた。

リオンからはまるで疲れたそぶりが見えず、汗ひとつ掻いていない。

フリージアは、扉を閉めると、扉のわきに移動した。

相変わらず美しい剣さばきに見入っていると、見物人の中から歓声とは違う声が聞こえた。

「なあ、あんた」

声の主を探すと、一人の青年がリオンに向かって歩いてるのが目に付いた。

第一章・3 出会いは……（後書き）

♪ぽ〜によぽ〜によぽによ魚の子〜、青い海から、や〜てきた〜
この曲は……言つまでもありませんね（笑）

今回は字数が少なくてすいませんでした¥（――）

第一章：4 弱者

リオンは声がした方を一瞥した。

一人の青年が自分に近づいてくるのを見て向き直る。

青年は、会話するのに適当な距離で止まった。

「なんか用か？」

この短い言葉の節々に、鍛錬を中断されたことによる不快感がこめられている。

だが、青年はそんなことにはまるで気づいていない。

「なあ、俺と勝負しないか？」

「断る」

即答。

青年は啞然として、ぽかんと口を開けている。

「くだらない。そんなことのために俺の邪魔をしたのか。不愉快だ。さっさと消えろ。」

呆然と立ち尽くしていた青年は、あわてて謝った。

「剣の鍛錬を中断させてしまったのは悪かった、謝る。でも俺と勝

負したほうが、いい鍛錬になるかもしれないぜ」

「何が言いたい？」

「俺はこれでも、王家主催の武闘会で四位になったんだぜ」

青年は、誇らしげに腰に手を当てて、ふんぞり返った。

リオンは、武闘会で四位という言葉で、青年に少し興味を持ったようだ。

「お前、強いのか？」

「少なくとも、そこらの旅人や冒険家に負けないくらいには強いと自負しているが」

青年のちょっとした挑発だ。

もちろん、挑発に乗るようなリオンではなかったが、戦う気にはなっていた。

リオンは口元に、微かに不敵な笑みを浮かべた。

それに気づいたのはディプロでも見物人でもなく、フリージアだった。

フリージアは一抹の不安を覚えた。

止めるべきか否か迷っていたが、いくらなんでもここで流血するような事態にはならないだろうと思いとどまった。

リオンは、口元に微かな笑みを浮かべたまま言った。

「面白い。遣り合おうか」

「そうこなくちな」

青年は喜色満面で、剣を抜いて両手でしっかりと握ると腰の前に持っていく、中段の構えをとった。

リオンも同じく両手で剣を握ると、中段の構えをとる。

青年は名乗った。

「俺はディブロ。ディブロ・グオリッツ」

「リオン・デルフィニウム」

リオンも名乗ると、静寂が流れた。

見物人たちも固唾を吞んで見守っている。

両者ともに弱点が見えず、警戒して動かない。

リオンが慎重になっているわけは、武闘会四位という肩書きもあるが、もうひとつ要因があった。

自分より体躯がいい相手が、自分よりリーチのある武器を持っていることだ。

リオンはリーチの差を考慮しながら戦わなくてはならない。

張り詰めた緊張の中、鳥だけはいつもと変わらずにさえずっている。

陽光を受け、ディプロの輝く金髪が風になびく。

「はあっ！」

短い気合とともに、ディプロが先にかかっていく。

ディプロの袈裟切りをすばやくはじき、踏み込んで突きを放つ。

ディプロは見事に剣先でリオンの剣先をはじき、バックステップで距離をとる。

リオンは追撃せず、その場で姿勢を整える。

再び対峙。

そして、先に切りかかったのはまたもやディプロだ。

ディプロは右足を踏み込むと、垂直に切りかかる。

金属の交わる音があたりに響く。

豪快に振り下ろされたロングソードを受け止めたりオンは舌打ちをした。

純粹に、すべての力をこめた両腕が振り下ろすロングソードは、

リオンの腕をしびれさせた。

うまく腕に力が入らないリオンを尻目に、ディプロはぐんぐん押し込んでゆく。

リオンは両足に力を入れて踏ん張っているが、少しずつ姿勢が崩れていった。

リオンは靴底でディプロの腹を蹴飛ばすと、完全に姿勢が崩れ、倒れこみそうになったが、剣から右手を離し、右手だけで側転をした。

ディプロは苦痛に顔を歪め、よろけて数歩後ずさりした。

だが、腹部の鈍痛に気をとられている暇などなかった。

リオンはすでに目前まで迫って来ている。

リオンは左下からショートソードを袈裟に放つ。

体勢の崩れているディプロにそれを防ぐ手立てはなかった。

フリージアと見物人たちから悲鳴が上がる。

ディプロはすんでのところで身をかわした。

だが、リオンは追撃の手を緩めない。

幾度となく金属音が轟く。

まともに体勢を整えられないまま、リオンの猛攻を受け続けなければならぬディプロは圧倒的に不利だった。

だが、突如として金属音が途切れた。

ディプロはすばやく体勢を整えると、訝しげにリオンを見る。

リオンはショートソードを鞘に収めると、宿の裏口に向かって歩き出した。

ディプロは慌てて呼び止める。

「待て！ 何処へ行くつもりだ！」

「朝食の時間だ」

「はあっ？」

啞然とするディプロ。

見物人たちも呆氣に取られている。

裏口に向かって歩くリオンの背中を、呆然としてみていたディプロの顔がみるみる険しくなった。

「ふざけるな！ そんな理由で勝負をやめるというのか！」

リオンは立ち止まったが、前を向いたままで見向きもしない。

「ふざけるな、だと？ お前のくだらないお遊びにつき合ってやつ

たんだ。これ以上俺に何を強要するつもりだ？」

ディプロには、くだらないお遊び、から先は聞こえていなかった。

「くだらないお遊び？ そう言ったのか？」

「ああ、そう言ったが。武闘会四位と言うからには少しは強いのかと思えば、安い陶醉に浸る愚鈍な愚か者か。弱者に興味はない。消えろ」

ディプロの目に火花が散った。

弱者呼ばわりされて誇りを傷つけられ、我を忘れて突撃した。

リオンは瞬時に向き直り、なぎ払いを軽く後ろにさがってかわすと、ディプロの懷に飛び込み、体をひねってみぞおちにボディープローを叩き込んだ。

「かつ……！」

ディプロはその場で少し浮き上がり、そして崩れ落ちた。

ディプロは横向きになって、体を丸めるようにしながらみぞおちを押さえている。

うまく呼吸ができず、笛の音のような息づかいになっていた。

呻き声すら声となって出てこない。

意識が飛びそうになる。

慌ててフリージアが駆け寄り、ディプロの前に両膝をついて座った。

「大丈夫ですか!？」

ディプロにフリージアの声は届かなかった。

見物人たちも、ディプロの元へ駆け寄る。

口々に心配そうに叫んでいるが、何ひとつディプロには届かない。不明瞭な意識の中、ディプロは忌々しそうに顔を歪め、リオンを見上げて、睨みつける。

リオンはすでにディプロに興味を失い、無表情に見下ろすだけだ。

リオンはディプロに背を向け、再び裏口に向かった。

ディプロは少し呼吸が楽になって、必死で声を振り絞った。

「ま……て……まだ……勝負……は……終わって……」

そこまで言うとは激しく咳き込んだ。

フリージアは心配そうに背中をさする。

すぐに咳は治り、すでに扉の前まで歩いていたりオンを睨む。

リオンは扉を開けると振り返った。

まだ何かを言おうとしているディプロを白眼視しながら冷たく言い放つ。

「弱者に興味はないんだよ」

あまりにも無慈悲で、非常で、残酷で、冷徹な言葉。

一度目に言われたときと違い、弱者という言葉は、ディプロの心を完膚なきまでに引き裂き、打ちのめした。

激しい憎悪と敵愾心のこもった瞳で睨みつけても、リオンはすでにディプロから視線をはずし、宿の中に入っている。

扉を閉めた音が、無情に響く。

フリージアは、申し訳なさそうに、ごめんなさいと何度も謝る。

「君のせいじゃないさ」なんて言う余裕はディプロにはなかった。

弱者……ただその言葉だけが自分の中で何度も反復する。

立ち上がって追いかけようにも力が入らない。

這いずることすらもできない。

みぞおちに残る鈍痛と、思うように動かない体が疎ましい。

視界が歪み、霞んでいき、徐々に暗くなっていく。

フリージアと見物人たちの叫び声が頭の中でうねり、何を言っているのかわからない。

呑み込まれる意識の中で、ドス黒い感情が芽生えていく。

そして、意識は闇に溶けていった。

第一章：4 弱者（後書き）

♪ 光はかーげのー、影はひかーりのー、果てまでつーいてーゆくの
だろー♪

BONNIE PINKの『鐘を鳴らして』

最近やたら後書きに力を入れていることに気付いた作者です。

デルフィニウムというのは花の名前です。

名前をつけるのが苦手な作者は、これからもちよいちよい花の名前
をつけると思います。

第一章：5 復讐と失ったもの（前書き）

大変長らくお待たせしました。

えっ、待ってない？

そっ、そんな〜（泣き

とにかく、私は一応学生ですので、更新はかなり不定期です。
これくらい遅くなることもあるのでご了承ください。

第一章：5 復讐と失ったもの

フリージアは厳しい表情で宿の階段を上っている。

ディブロが気絶したあのと、看病しようと思い、ディブロを背負ったわりと体躯のいい見物人の一人に、「私もついて行きます」と言ったのだが、「こいつは俺が責任もってつれて行くから」と、それだけ言うと走っていつてしまった。

仕方なく宿の戻り、ホールに向かった。

ホールにリオンの姿はなく、かわりに階段から下りてきたミレイアが、リオンはすでに二階の部屋で朝食をとっていることを伝えてくれた。

そして今現在にいたるわけだ。

言いたいことは山ほどあった。

二階に上り、廊下を渡って部屋の前に立ったフリージアは、扉をノックした。

中から「入れ」という声がしたので、扉を開けた。

リオンはゆったりと椅子に腰掛けていて、テーブルに置かれたスープレースプーンでずくい、上品に口元へ運ぶ。

テーブルには他にもパンとコーヒーが置かれている。

フリージアは厳しい表情のまま、ずんずん歩く。

テーブルを挟んでリオンと向かい合う形になったフリージアは、静かに、だが叱責の意図が伝わるように語調を強めて言った。

「なぜあんなことを言ったのですか」

リオンは特に反応せず、パンに手を伸ばし、千切って口元へ運ぶ。そんなリオンをフリージアは何も言わず、ただじっと見つめる。

重苦しい沈黙の中、パンを飲み込んだリオンは呆れたように小さくため息をもらし、開口した。

「事実を吐露したまでだ」

「事実かどうかはわかりませんが、あんなことを言わなくてもいいでしょう！」

フリージアは両手をバンツとテーブルにたたきつけた。

両手がひりひりするが、そんなことは気にならなかった。

リオンはそんなフリージアを冷ややかに見つめている。

リオンにはフリージアが憤る理由が理解できなかった。

「何をそんなに憤る？ お前には関係ないことのはずだ」

「確かに私はあのお方のことをよく知りません。しかしあんなこと

を言われれば誰だって傷つくことは知っています!」

フリージアの声がだんだん大きくなってきた。

フリージアはすでに怒り心頭だ。

リオンのあまりにも心無い言葉は、彼女には到底許せるものではなかった。

「今すぐにあのお方のところへ行って謝ってきてください!」

「何故だ? 事実を言うのがそんなにも悪いことなのか?」

「ですから! 言わなくてもいいことがあると言っているのです!」

「言わなくてもいいことがある? 事実をひた隠しにして生きるとでも言うのか?」

「そんな難しいことを言っているわけではありません! 思いやりを持つてくださいと言っているのです!」

「思いやり……くだらない。そんなものは所詮人間の馴れ合いという情性に過ぎない」

「なっ……!」

フリージアは言葉を失ってしまった。

いろんな言葉が喉元まで出掛かっているが、何一つ出てこない。

その言葉は叱責、怒り、罵倒。整理しようとするほど言葉は混濁していく。

フリージアはキッと睨みつけた。

フリージアのような生真面目な人間が眼に角立てていれば、普通は謝ったり、目を逸らしたり、萎縮いしゆくしたりするだろう。

だが、リオンは謝りもせず、目も逸らさずに直視している。

しばらくの静寂。

睨みあっている（睨んでいるのはフリージアだけ）間も、リオンはパンに手をつける。

リオンは残っていたスープを飲み干し、パンをたいらげた。

最後に残ったコーヒーに手を伸ばし、ゆったりとした動作で口に運び、優雅にする。

一度コーヒーをテーブルに置いて、答えを求めるようにフリージアの言葉を待った。

だが、フリージアは何も答えなかったため、再度コーヒーに手を伸ばす。

そしてフリージアは沈黙を破った。

「リオンさん。こんなことは言いたくないのですが、あなたは人として最低です」

すでに口元まで運ばれていた、コーヒーを持つ手がピタッと止まった。

それを見たフリージアは、ウツという顔をした。

怒りに任せて言いすぎてしまったと、自責の念に駆られる。

謝罪の言葉が見つからず、ただ申し訳なさそうにうなだれた。

リオンは止まっていた手を動かし、コーヒーを一気に飲み干した。

空になったコップをテーブルに置くと、ゆっくりと立ち上がる。

リオンは壁に立てかけられた斧に向かって歩き出した。

斧を右手で持つと、今度は扉に向かって歩き出す。

そんなリオンを見ていたフリージアは、とにかく何か謝らなければと、慌てて謝罪した。

「あの、さっきは言い過ぎました。ごめんなさい。本当にごめんなさい」

フリージアは深々と頭を下げた。

リオンは扉の前で立ち止まり、振り返らずに前を向いたまま無感情に答えた。

「謝る必要はない。お前は事実を言ったままでだ」

「えっ？」

「人として必要なものなどの昔に捨てた。俺は人として最低どころか、もはや人ですらない」

フリージアは困惑した。

てつきり怒っているのかと思ったが、その口調からは怒りは感じられない。

それどころか、自分のひどい言葉をはつきりと肯定し、そのうえでさらに卑下するようなことを言った。

だがそれは、卑下するというような口調ではなく、あくまで事実を吐露したというように、あまりに無感情だ。

まるで、「雨が少し降っている」と言ったのにたいし、「少しじやなくて土砂降りだろ」と、少し表現を強めただけくらいにしか聞こえなかった。

それだけにフリージアの心は絞めつけられるように痛んだ。

「違う。そんなことはない」と、言おうとしたが、リオンはすでに扉を開けて、部屋を出ている。

リオンは背を向けたまま扉を閉めた。

残されたフリージアは、ただただうなだれることしかできなかった。

ディブロ・グオリッツ。

彼は剣の才覚に恵まれていた。

人の数倍のスピードで剣の腕をあげ、二十五という若さにして警備兵隊長になった。

あるとき領主に武闘会に出てみないかと言われ、賃金を渡されて、軽い気持ちで首都に赴いた。

首都に着いた彼は、初めて体験する都会の喧騒にやたら興奮し、はしゃぎまわっていたが、ここは割愛。

首都の闘技場で受け付けを済ませた彼は、数日後に控えた武闘会に向けて、疲労困憊になるまで首都を遊覧し続けた。

結果としてくたくたになりながら臨んだ試合は圧勝に終わった。

そのまま順調に勝ち進み、彼は五百人近く集まった出場者の中で、四位という偉業を成し遂げた。

彼が領地に帰ってきたとき、領地の人間は熱烈な歓声と拍手で向かい入れた。

故に彼という存在は、領民にとって誇りとなり、この領地にあま

ねく轟くことになった。

この領地の人間で、彼のことを知らないものはいないと言っても過言ではないほどに。

領主は、彼に最大の褒美と賛辞を送った。

彼は喜んで褒美を受け取ったが、それ以来この領地を退屈だと思ふようになった。

仲間の警備兵と試合をしても、誰も相手にならず、何かが起こったりするわけでもない平和な領地に、彼はほとほと嫌気がさしていた。

少しの混沌を望むようになったころ、一人の少年とであった。

全身黒尽くめの少年は、華麗に舞い、卓越した剣技を見せ付けていた。

そして彼は、少年に勝負を挑んだ。

自身が敗北するなどとは微塵も考えずに。

彼が、どこからかやってきた旅人に敗れたという噂は瞬く間に広がった。

次の日からリオンを取り巻く状況が変わった。

<旅人の安らぎ>に、老若男女問わずリオンを一目見ようと野次馬たちが押し寄せてきたためだ。

そのため、ミレイアは客でもない彼らを追い返すのにやきもきる破目になった。

だが、野次馬たちを追い払っても、少したつとまた新たな野次馬が現れるということが繰り返されたため、ミレイアは追い返すことをあきらめてしまった。

ほとんど無理やり居場所を作った野次馬たちは、リオンがホールに下りてくるのを待った。

しかし、リオンは部屋に引きこもったままめったに降りてこなかった。

そのため諦めて帰るものも多々いたが、一部は何時間も待ち続ける者がいた。

そしてリオンが下りて来た時、運よくその場にいたものは、さまざまな視線を投げかけた。

それは誇りを汚されたことによる憎悪や怒りであったり、純粋な羨望であったり、畏敬の念であったりした。

しかし、リオンは一切の感情を受け付けず、睥睨^{へいげい}することによってすべての視線をねじ伏せ、恐怖の色に染め上げた。

リオンにとって変わった状況は、野次馬たちが押し寄せてくるということだけではなかった。

毎朝、鍛錬の時間にディブロがあきらかな憎悪と憤りをその目に

湛え、勝負を持ちかけて来るようになったことだ。

リオンは無視を決め込んだが、ディプロはお構いなしに襲い掛かってきた。

リオンは仕方なくディプロが襲い来るたびにねじ伏せた。

そして、リオンたち滞在から六日目の朝、事件は起こった。

空を覆う灰色の雲が陽光をさえぎるセインバーグ領地。

朝霧がこもるセインバーグ城の中庭。

そこにはディプロとブロードが立っていた。

ブロードに背を向けているディプロは、振り返らずに前をむいたまま言った。

「何のようだ？」

あきらかに苛立った様子のディプロに、諭すような口調で言う。

「またあの少年のところに行くのか？　いつまでそんなことを繰り返す？」

ディプロは振り返った。

ディプロの目を見たブロードは身震いした。

その目は憎悪や怒りだけでなく狂気も宿っている。

「勝つまで繰り返す」

「無理だ。おまえがあの子に敗れて以来血反吐を吐くほど、それこそ朝から晩まで鍛錬していたのは知っている。だがな、剣の腕は一朝一夕で上がるものではないことくらい知っているだろう。それに、彼がいつまでこの領地にいるかわからない」

「わかっているさ、そんなこと！」

ディプロは声を張り上げた。

「だからって負けたまま終われって言うのか！ そんなことできるか！ 勝つんだよ！ なにがなんでも！ 絶対に！」

ブロードも負けじと言い返す。

「何がわかってるんだ！ 仮にあの子がこの領地に一ヶ月滞在するとして、その間に少年に勝てるのか？ いや、不可能だ。その前に、朝から晩まで体を酷使するお前が先にぶっ倒れるはずだ」

「知るか！ たとえ体がぶっ壊れても！ それでも俺は」

「ふざけるな！ お前は警備兵隊長だぞ！ お前の体はお前一人のものじゃないんだぞ！」

「知るか！ 俺がぶっ壊れたら代役でも立てりゃいいじゃねーか！」

「馬鹿野郎！ 何でそうなるんだ！ たかが一度の敗北で何故そこまで熱くなる！」

「黙れ！」

ブロードの顔が強張り、口を閉ざしてしまった。

ディプロが放った言葉には、有無を言わせぬ迫力があつた。

二人は無言のまま、冷戦状態に突入。

殺しあい発展しそうなほどの形相で睨み合う二人。

少し時間が経過し、ディプロが口を開いた。

「どうしても俺を止めるつもりか？」

「当然だ」

「そうか……」

ディプロはうつむいた。

「なら仕方ないな」

ブロードの顔がぱあっと明るくなった。

説得に成功したと思ったのだ。

しかし、ブロードはすぐに自分の思い違いだを知る羽目になった。

ディプロはゆっくりと頭を上げて、ブロードの目を見据えた。

「お前をぶっ飛ばしてでも、俺はあいつのところへ行くまでだ」

冗談でも脅しでもなく、決然とした口調だった。

ディプロの手がゆっくりとロングソードの柄に伸びる。

それを見たブロードは奥歯をかみ締めた。

「本気……なんだな」

ディプロは答えず、決意をこめた瞳で見据えたまま、ロングソードを抜いた。

ブロードもロングソードの柄に手を伸ばし、躊躇うように剣を抜く。

互いに中段の構えをとり、二人はにらみ合った。

緊迫した状況の中、一陣の風が吹く。

一瞬とも永遠ともいえぬ時間が過ぎたころ、ブロードが力なく腕を下ろした。

首をぶんぶん横に振ったあと、苦虫を噛み潰したような表情になった。

「行つてこい。俺にお前を止められるだけの力はない」

ディプロは剣を鞘に収めると、背を向けて正門に向かって歩き出した。

ブロードは、憎悪にとらわれた友人の背を、ただただ見つめることしかできない自分の無力さをかみ締めることしかできなかった。

フリージアは自分の部屋の窓からリオンを見つめていた。

眼下で剣を振るうリオンはなんら変わらない。

変わったのはリオン以外の人間だ。

路地に群がる野次馬たちも、リオンを見る目がただの好奇だけではなく、さまざまな感情が入り乱れたものになっていた。

そしてフリージアも変わった。

あの日以来、リオンと話そうとしても気まずくて話しかけられなくなってしまった。

ただ、リオン自身は普段どおりで気まずい雰囲気を作っているわけでもなく、フリージア自身が話しかけられないでいるだけだ。

そのことにフリージアも気づいてはいるのだが、謝るタイミングが見つけられずに今現在にいたるわけだ。

フリージアは嘆息をつくと空を見上げた。

空を覆う灰色の雲は陽光をさえぎっている。

フリージアはポツリと呟いた。

「雨が降りそう」

すると、初夏にしてはずいぶん肌寒い風が吹いた。

フリージアはぶるつと身を震わせて窓を閉じる。

フリージアは顔を洗うと部屋を出て廊下を渡り、階段を下りた。

薄暗いホールには、いつもいるはずの人物が居らず、代わりに一人の下男がテーブルを拭いている。

不思議に思っていると下男がフリージアに気づき、にんまり笑って声をかけてきた。

「おはようございます」

「おはようございます。ミレイアさんはいらっしやらないのですか？」

「ミレイアさんは今出かけていますよ」

「そうですか」

「朝食はいかがなさいますか？」

「スープとパンをお願いします。リオンさんを見に行きますのでゆつくりして下さってけっこうですよ」

「わかりました」

フリージアは裏庭に続く廊下を渡り、扉を開けた。

まず目に飛び込んできたのはリオンの踊るような剣の舞。

本当に、驚くほどに何も変わっていない。

本来人は、何らかの感情を見せられれば何かしらの感情を持って反応するものだが、リオンにはそういう反応がまったくくない。

それはつまり、野次馬たちの様々な感情のこもった視線に、そして人の感情そのものに無関心であるという証拠だ。

リオンさんは存立した存在なのかな、などと考えているとリオンと目が合った。

リオンの瞳は透き通った氷のように美しく、冷たく感じられた。

フリージアは複雑な感情を持って見つめていると、リオンは立ち止まって剣を収めた。

リオンはフリージアに向かって歩き出す。

正確にはフリージアの後ろにある宿の扉に向かって歩いている。
フリージアもそのことに気づいていたので、扉に脇に移動した。
リオンが扉の取っ手に手を伸ばしている時、フリージアは野次馬
たちの異変に気づいた。

どよめく野次馬たちは、たじろぐように左右に分かれた。

瞬間、フリージアは戦慄いた。

現れた道を、ゆっくりと歩きながらディプロはロングソードを抜
いた。

その目に憎悪と憤りを宿して。

取っ手に手をかけていたリオンは、視界の端で小さく震えるフリ
ージアを見て、誰が来たのか瞬時に察知した。

小さくため息をついて、取っ手に手をかけたまま、振り返りつつ
言った。

「またお前か。いいかげんに——」

リオンは言葉を詰まらせた。

ディプロの目に気圧されたわけではない。

ディプロから放たれる微かな殺気を感じ取ったからだ。

リオンの顔つきが一気に険しくなった。

取っ手から手を離し、ショートソードの柄に手を伸ばす。

ディプロは立ち止まり、リオンと対峙する形になった。

睨み合う二人。

リオンは剣を抜くと、口を開いた。

「そっちがそのつもりなら、俺もこれ以上は」

「リオンさん！」

リオンは横目でフリージアを見た。

フリージアは何か訴えかけるように見つめていた。

リオンは再びディプロに視線を移した。

「……しばらくは再起不能にする。それ以上は譲歩しない」

フリージアは不満そうな表情をしたが、自分に二人を止められるだけの力がないのは明白な事実だったので、仕方なく見守ることにした。

だが、もしもの時は、二人の間に割って入っても止める決意を固めた。

リオンは、背後に宿の壁、となりにフリージアがいる状況は不利と考え、慎重に弧を描くようにサイドステップを踏み、周囲に障害物がないところで立ち止まった。

平和な朝のひと時に流れる不穏な空気。

睨み合ったまま動かないリオンとディプロ。

どれほどの時間が経過しただろうか。

先に仕掛けたのはディプロだ。

構えも何もない状態で飛び掛ったディプロは、袈裟に切りかかった。

リオンは下から振り上げて弾き返すと、勢いに任せて一回転して薙ぎ払う。

ディプロはバックステップでかわしたが、リオンは踏み込んで突きを放った。

ディプロは剣を振り下ろして強引に叩き落とし、リオンの剣が地面にめり込んだ。

リオンは焦った様子もなく剣を引き抜こうとする。

ディプロは、リオンが剣を引き抜こうとしている隙をつき、首を狙って薙ぎ払った。

しかし、リオンは剣を両手で握ったまましゃがむことで回避し、

そのままバック宙をして、剣を引き抜くと同時に切り上げる。

野次馬たちは悲鳴を上げた。

血に濡れたりオンの剣先。

かなりアクロバティックなりオンの斬撃は、ディプロの肩を掠めていた。

ディプロは肩から血を流しながらも、臆することなく突撃し、リオンが着地するころには、すでに攻撃態勢に移行していた。

ディプロは胸めがけて斬撃を放つ。

それをリオンは腕を折り曲げて、手を肩の位置まで持っていき、剣を斜め下に向けて斬撃を受け止めた。

ただ、体が吹っ飛びそうなほどの衝撃を受け、体勢が崩れてしまった。

そこへディプロの容赦ない垂直切りが頭上に襲い掛かる。

リオンはそれを受け止めたが、腕が痺れるという事態に陥ってしまった。

苦々しげな表情をするリオンを尻目に、ディプロはいきおいよく押し弾く。

危うく転倒しかけたリオンの胸に、早くも斬撃が迫っている。

何とか弾き返したものの、すぐさま斬撃が飛んできた。

あきらかに動きの切れが以前とは違っている。

幾度となく響く剣が交わる音。

激しい斬撃の嵐を崩れた姿勢のまま受け止めるリオン。

そして、一際強く金属音が響いた。

二人は鏝迫り合っている。

剣と剣が交わる点から火花が散る。

押し崩されそうになっているリオンは、剣と剣の間からディプロの目を見た。

その目に宿る、微かでありながら明白な殺意をリオンは感じ取った。

瞬間、リオンの目にも殺意が宿った。

リオンが放つ殺気は瞬く間に人々を呑み込み、恐怖の色に染め上げる。

唯一、ディプロだけが恐れることなく、さらに殺意を強めた。

ディプロはさらに力をこめ、リオンを押し込む。

リオンは以前やったように、靴底で蹴り飛ばそうと思ったが、今

のディプロなら絶対に耐え切ると思い、バックステップで距離をとる。

だが、ディプロはあっという間に距離をつめ、踏み込んで突きを放った。

リオンは左足を軸に右足を外側に持つていくことでこれを回避。

横腹を掠めたものの、かわりに一回転しながら水平に斬りかかった。

ディプロは瞬時にバックステップで回避したが、かわしきれずに横腹を掠めた。

飛び散る鮮血が地を濡らす。

リオンは追撃せずにバックステップで距離をとった。

ディプロは激しい剣幕で睨み、リオンは無表情に近いものの目は鋭くなっている。

ただただ傍観するしかなかった野次馬たちは目の前の状況に困惑し、気が気でなかった。

それは、野次馬たちが直感してしまったためだ。

これはもはや“勝負”ではなく“殺し合い”だということを。

そしてなにより、二人の血に濡れた剣が、体から流れる血が物語っていた。

それでも誰も止めなかった。止められなかった。

リオンが放つ殺気のせいもあるが、ディブロの威圧感がそれを許さなかった。

しかし、フリージアだけは違った。

フリージアは、これ以上傍観しているのは危険だと思い、止めに入ろうとした。

その時だった。

「ディブロ！」

突如としてどこからか声が聞こえた。

その声の主は野次馬たちの中にいたが、肩で息をしている。

睨み合ったまま動かないリオンとディブロ以外の全員が、その男に注目した。

「ディブロ……はあっ、はあっ、大変だ。すぐっ、すぐに……げほっ、げほっ」

息が切れているのに無理やりしゃべろうとしたため、その場でむせ返ってしまった。

かなり慌てた様子で、何か切迫した事態が起こっているということが理解できる。

しかし、ディプロは素知らぬ顔で言う。

「今、俺は忙しいんだ。他を当たれ」

むせていた男は、一度深呼吸して息を整えると、大声で捲くし立てた。

「バカヤロウ！ 魔物だ！ 魔物が出たんだよ！」

「えっ！？」

ディプロの表情が変わり、いきおいよく振り向く。

リオンも微かだが反応していた。

ディプロはずいぶん動揺した様子でその男に歩み寄り、矢継ぎ早に訊いた。

「魔物が出た？ どこに出たんだ？ 警備兵たちはどうしている？」

「あっちだ。あっちの方」

そういつて指差した方向は、タール山脈の方だった。

「タール山脈の第二関門の方だ。警備兵たちはすでに向かっている」

「わかった。ありがとう」

ディプロは踵を返して走り出した。

その顔は復習に取り付かれた鬼の顔ではなく、警備兵隊長のそれだった。

ディプロの走っている後姿を見ていたリオンは小さく不敵な笑みを浮かべた。

リオンはフリージアの方に振り返り、矢継ぎ早に言う。

「俺は奴の後をついて行く。お前はここで待っている」

「えっ。でも、私も」

「お前が来ても邪魔なだけだ」

リオンの歯に布着せぬ言葉のせいで、フリージアは何も言えなくなってしまった。

事実、足手まといにこそなれ何の役にも立たないであろうことはフリージア自身もわかっていた。

リオンはディプロの後を追いかけるように走り出した。

リオンのほうが速いのか、ディプロに追いつき、横に並んだ。

並走するリオンを忌々しげにディプロは睥睨する。

「お前！ 何でついて来るんだ！」

「お前と遣り合うよりは面白そうだからだ」

「ふざけんな！ さつさと戻れ！」

「お前の命令をきいてやる義理はない」

ディブロは苦々しげに睨み付ける。

一瞬、無理やりにもとめようと思ったが、そんなことをしている時間はないと判断した。

「くそっ！ 勝手にしやがれ！」

全速力で疾走するディブロ。

ディブロの心臓が早鐘のように鳴り、得も言われぬ不安と焦燥感に駆られていた。

途中、逃げ惑う人が何人か通り過ぎた。

次第にぼつりぼつりと雨が降り始め、二人の体を濡らしていく。

雨に濡れた体に肌寒い風がぶち当たり、凍えそうになる。

しばらくすると、ハードレザーに身を包んだ十人の警備兵たちが、一体の魔物と戦っているのが見えた。

つるつるで気色悪い緑色の肌に、三メートルはあろうかという巨体のトロールが、体長の半分近くある棍棒を持っている。

もともと四体いたのだろうが、地に伏せる三体のトロールは血ま

みれになって絶命している。

一体は首を刎ねられ、一体は心臓を貫かれ、一体は体中をやたらめったら斬られまくった痕があった。

共通して片足が切断されているところを見るかぎり、倒れこんだところに一気に攻撃を仕掛けたのだろう。

残る一体のトロールは、怪我を負いながらも奮闘しているが、攻撃が大振りなためかことごとく避けられ、警備兵たちに怪我人はいない。

ディプロは警備兵に怪我人がいないことを知り、表情こそ厳しいものの、内心でほっと胸をなでおろした。

次の瞬間、飛び込んできた光景に目を疑った。

一人の警備兵が、トロールに果敢に飛び込んだが攻撃をかわされてしまい、大きな隙ができてしまった。

その警備兵を、見慣れた顔の男がかばって、横から飛んできた棍棒をまともにくらってしまった。

変な形にひしゃげて吹っ飛び地面にたたきつけられ、激しく転がって仰向けで止まった。

喉が上下に動き、口から溢れるほどの血が湧き上がる。

ピクリとも動かない体を見れば、もはや彼の魂がこの世に存在していないことが理解できる。

ディプロは呆然と立ち尽くしてしまい、警備兵たちもその場に硬直し、死人と化した仲間の姿から目を離せなくなってしまった。

だが、悲嘆にくれる時間許されなかった。

敵を一人殺したことで、トロールは凶暴性を増し、うなりながら猛攻を仕掛けてきたためだ。

警備兵たちは慌てて回避し、反撃しようとしたが、あきらかに統率がなくなつて苦戦をしいられている。

ディプロの視界には、苦戦する仲間たちの姿が入っているが、見えてはいない。

全身から力が抜け、その場に崩れ落ちそうになる。

「ブロード……」

震えた声で呟いた言葉。

ブロードの元へ駆け寄ろうとした。

そこで、一人の警備兵がディプロに気づいた。

「隊長！」

涙声の悲痛な呼びかけに、ディプロは我に返った。

ロングソードを握る手に力をこめる。

絶対に殺す。

憎悪と怒りの炎をその目に宿し、ディプロは突進した。

しかし、復讐を果たすことはできなかった。

人の死を目の当たりにしても何も感じていないリオンは立ち止まることなく、敵を見つけた喜びに嬉々としてトロールに突っ込んでいた。

トロールの懐にもぐりこんだリオンは片足を切断すると、倒れ込んだところであっさり首を跳ね飛ばし、瞬殺した。

リオンは血振りすると、ショートソードを鞘に収めた。

リオンは、期待を裏切られて落胆したような表情でトロールの死骸を眺めていた。

ディプロはなすすべもなく立ち尽くす。

ロングソードが手から滑り落ちる。

不思議と憎悪と怒りはすぐに消えた。

ディプロは気づくとブロードのところに足を運んでいた。

警備兵たちもブロードのもとに重い足取りで向かう。

ブロードの顔はすでに血色はなく、開かれた目はどこにも焦点は

合っていない。

ディプロはブロードの横に崩れるように両膝をついた。

ディプロは震えた声で呟いた。

「うそだろ？　なあ、ブロード？」

震える手をブロードの頬に伸ばす。

頬に触れた瞬間、口にたまっていた血が溢れ、手に生暖かい感触が伝わった。

頬はとても冷たく、そこにブロードがいないことがわかる。

ディプロの胸に何かがこみ上げてきた。

それを払拭するかのように、大声で呼びかける。

「おい！　冗談だろ！　なんか言えよ！　ブロード！」

両手で肩をつかみ激しく揺さぶるが、口から血がこぼれるだけで何の反応もない。

ディプロは頭で理解していたが、心で拒否していた事実を受け止めた。

ふっと全身が脱力し、肩から手が離れ、力なくならず。

こみ上げる悲しみと、世界が崩壊したような喪失感の中、ほんの

数十分前のことを思い出した。

「こんなのってないだろ……まだ仲直りしてないんだぞ……」

すると、十八歳くらいの若い警備兵が泣きじゃくりながら、ディプロのそばに来た。

「ひつく……すいません。僕を……僕をかばったばかりに……ううつ……すいません、すいません……」

ディプロに謝罪の言葉は聞こえなかった。

ディプロは空を見上げる。

太陽の光をさえぎる灰色の雲は、のしかかってくるかのように重苦しく感じられた。

小雨はディプロの目に落ち、涙となって零れ落ちた。

ディプロはこみ上げる悲しみを、胸のうちにとどめておくことに耐えられなくなった。

「うあああああああ！！」

ディプロの悲痛な叫びを皮切りに、空が慟哭を始めた。

痛いほどたたきつける空の涙は、警備兵たちの体や剣についた血を流したが、悲しみを流すことはない。

ある者は嗚咽を漏らし、ある者は慟哭し、ある者は涙を流すまい

と空を睨んでいる。

その光景を白眼視するリオンの姿はとても歪だ。

ディプロが望んでいたはずの混沌は、自分のいない間に、自分の望まぬ形で、悲劇という傷だけを残した。

第一章：6 復讐者（前書き）

うわゝ。

約一年ぶりの投稿。

長い間あけてすみませんでした。

第一章：6 復讐者

薄暗いリオン部屋で、リオンとフリージアがテーブルを挟んで椅子に座っている。

「そうですね。そんなことが……」

フリージアは沈痛な面持ちになった。

リオンが今朝起きた事件を詳細に話したためだ。

リオンの部屋に流れる重苦しい沈黙の中、窓の外からは雨の持続音が、天井からは雨が屋根をたたく連続音が響く。

リオンは右肘をテーブルにのせて頬杖をつき、少しの間、思慮にふける。

まだ乾ききっていない髪から雫が落ちる。

「腑に落ちないな」

「えっ？ 何がですか？」

フリージアの疑問詞を無視してリオンは立ち上がり、そのまま扉に向かって歩き出した。

「どこへ行くのですか？」

「少し出かけてくるだけだ」

「出かけるって、外は大雨なのですよ」

「すぐに帰ってくる。お前は待っている」

リオンは扉を開けると部屋を出て、背を向けたまま扉を閉めた。

ひとり残されたフリージアは、その場で死んだ者を想い、手を組んで祈りをささげる。

それから十分ほどたったところ、扉が開く音がして、フリージアは振り返った。

そこには、全身ずぶ濡れになったリオンがたたずんでおり、足元に少しずつ水溜りができていく。

リオンの髪は垂れ下がり、顔に纏わり付いて鬱陶しそうだ。

フリージアは慌てて立ち上がり、リオンのもとに駆け寄った。

「大丈夫ですか？ あつ、タオル持ってこないと」

「いや、いい」

リオンはフリージアを制止すると、髪をかき上げていつものツンツンした感じに戻した。

「それより、さっき何をしていたんだ？」

すでに踵を返してタオルを取りに行こうとしていたフリージアは、振り返ってリオンの疑問に答えた。

「あの、お祈りしていました」

「何のために？」

「亡くなつたお方のために、です」

「いつから？」

「リオンさんが出て行つてからです」

リオンの^{まなじり}目が小さく動いた。

「俺が出て行つてからということとは、三十分くらいか。その間、ずっと祈っていたのか？」

「はい。そうです」

フリージアは少し物悲しそうな表情になった。

「私は修道女ですから。誰かのためならいくらでも祈ることが出来るのです」

「……そうか」

リオンは何か言おうとしたが、喉元まで出てきた言葉を飲み込んだ。

「今から領主の城に行く。ここには戻ってこない。お前も準備しろ」

「ええっ！」

唐突に言い渡されてビックリしているフリージアをよそに、リオンは部屋の隅に置いてある荷物に向かつて歩き出す。

「ちよつ、ちよつとまってください。話がよく見えないのですが」

「一緒に来ればわかる。早く支度しろ」

ふくれっ面するフリージアを完璧に無視しながらリオンは荷物を背負い、もう一つを右手に持った。

フリージアは少しいじけながら言う。

「わかりました。身支度してくるのでホールで待っていてください」
フリージアは部屋を出ると、開けっ放しになっていた扉を音を立てないように閉めた。

自分の部屋に戻って身支度を終えたフリージアは、ホールに向かった。

途中、リオンが通った後なのか、廊下や階段がびしょびしょに濡れている。

掃除が大変だろうな、と思いながら歩きホールにつくと、玄関の脇の壁に腕を組んでもたれかかっているリオンの姿が目に入った。

あたかも、何時間も待たされていたかのような、不機嫌そうな無表情をしているリオンを見て、フリージアは慌てて駆け寄ろうとした。

「あ、ちよつと待っておくれ」

突如、最近聞き慣れた声に呼ばれて、声が聞こえた方向である左手に振り向くと、ちょうど厨房から出てきたミレイアが近づいてくるところだった。

「ミレイアさん、帰ってきていたのですね」

「少し前にね」

よく見れば、ミレイアの髪は濡れており、今しがた帰って来たということが分かる。

「まったく。嫌になるね。途中で雨はふるし、嫌なこともきいちまったしね」

フリージアは、ミレイアの言う『嫌なこと』が何のことかすぐにわかった。

「ブロードさん……」

「殺したって死なない男だと思っていたのにねえ。まったく、常連客が一人減っちまった」

ミレイアは寂しい微笑みを浮かべた。

あまりにも痛々しいその笑みは、フリージアの胸を締め付けた。

ミレイアは、うなだれてしまったフリージアを気遣うように話をかえた。

「そういえば、出かけるんだってね。さっきあの子から聞いたよ」

「あつ、はい。領主様のところへ行くんです」

「領主様のところに？ 何で領主様に会いに行くんだい？」

「えつと、それは……」

フリージアは言葉に詰まった。

何も知らされていないフリージアには、答えられるはずがない質問だった。

フリージアは横目にリオンを見た。

リオンは依然として、腕を組んで、不機嫌そうな無表情を決め込んでおり、視線で「早くしろ」と催促している。

「ごめんなさい。私は何も知らないのです」

「えつ？ でも、あのこは出かけるって言ってたけど」

リオンを見ながら不思議そうな顔をするミレイアに、フリージアは、わざとリオンに聞こえるように大きな声で言った。

「リオンさんは、私の意見は全部無視して、独断で何もかも決めるんです！」

聞こえているにもかかわらず無視しているリオンを見て、ミレイアは苦笑を漏らした。

「大変な思いをしてきたんだね。あのこは護衛なんだろう？ 護衛の方が主導権を握ってるのもおかしい話だね」

「名目上は護衛ですけど、実際は一緒に旅をしているのと変わらないんです。フルデルト教会は、たとえ布教でも、修道女が男女一組での旅なんて許しませんから」

「ああ、それでかい」

納得したというようにミレイアうなずいた。

「つまり、あんたも、果たされない想いを胸に抱えて禁じられた恋に身を投じる乙女というわけだね」

「違います！」

真っ赤になつて否定するフリージアを見て、ミレイアは豪快に笑った。

「おい」

今の声は、ずっと黙っていたリオンのものだった。

フリージアとミレイアの視線がリオンの注がれるなか、リオンは苛立ちを隠さずに言う。

「いつまでしゃべり続けるつもりなんだ。早くしろ。俺は気が長くない」

フリージアは怒りを通り越して思わず苦笑してしまった。

「そういうわけなので、私たちはもう行きます」

「ああ。気をつけていくんだよ」

「はい。お世話になりました」

フリージアはお辞儀をすると玄関に向かって歩き出し、それを見たりオンは壁から背を離し、玄関の扉を開けて外に出た。

ミレイアと別れてから数分、リオンとフリージアは領主邸に向かって歩き続けた。

リオンはすでに領主の城までの道を村人に訊いていたのか、迷うことなく大通りを突き進んでいる。

たたきつけるような雨の所為で二人はずぶ濡れになり、リオンはフードをかぶっても意味がなかったのか、フードをかぶっていない。フリージアはうつむき加減に、歩いていた。

ミレイアのことを考えると、自然と足取りが重くなった。

ミレイアは豪胆に笑っていたが、ずいぶん無理をしていたことを、フリージアはわかっていた。

明るく振る舞いの裏に深い悲しみがあることを、フリージアは痛いほどわかっていた。

全ては、自分に気を遣わせまいとして気丈に振舞っていたという

こともわかっていた。

だからこそ、気を遣わせてしまった自分が情けなくて腹立たしくてどうしようもなかった。

自噴と自責の念に、うつむいてため息をついた。

突然、何かに腕を引っ張られて大きくバランスを崩した。

転びそうになったが、リオンがうまく支えたおかげで転ぶことはなかった。

「あ、ありがとうございます……」

言いかけて、フリージアは硬直した。

顔を上げるとリオンの顔が目の前にあり、しかも、抱きしめられているに等しい状態だったからだ。

さっき引っ張られたほうの腕もリオンにがちりつかまれている。それはつまり、フリージアを引っ張ったのはリオンに他ならないということだ。

フリージアはうわずった声で訊いた。

「い、いったい何を？」

「何をぼんやりしている。壁にキスでもするつもりだったのか？」

「えっ？」

フリージアは素っ頓狂な声を上げた。

辺りをきよろきよろ見渡してみると、ついさっきまでの進行方向に木造の家があった。

あと一歩踏み出していれば、間違いなく壁にぶつかっていたはずだ。

フリージアはさらにしょんぼりした。

「すみません……」

リオンは冷たい目で見つめていたが、フリージアを離してまた歩き出した。

フリージアは、今度はちゃんと前を見ながらリオンの後についていった。

いつのまにか、領主の城が見えてきた。

正門の前には、鉄製の格子門を挟むように、二人の警備兵が槍を持って立っている。

正門に近づいていくと、一人の警備兵が訝しげに訪ねてきた。

「失礼。ここは領主様の邸宅です。何かご用件がありますでしょうか？」

「用がなければ、こんなところに来はしない」
警備兵は眉をひそめた。

「失礼しました。しかし、領主様は、現在ご多忙を極めております。ご用件は私が中へお伝えしましょう。なんとお伝えすればよろしいでしょうか？」

「お前ら下っ端に話すだけ時間の無駄だ。さっさと門を開けろ」

リオンの無礼千万極まる言い方に、応対していた警備兵もさすがに不快感をあらわにし、もう一人の警備兵は憤慨して突っかかってきた。

「おい！ 下手に出てりや、いい気になってんじゃねーぞ！」

「よせ、下がっている」

「こんなこといわれて黙ってるってのか、フォール！」

「いいから下がれ」

突っかかってきた警備兵は不満そうにぶつぶつと悪態をついたが、おとなしく下がった。

突っかかってきた警備兵を制止した、フォールと呼ばれた青年は厳しい表情で、リオンの前に立ちふさがる。

「確かに私は下っ端に過ぎません。しかし、私たちには領主様をお守りする使命があるのです。今、民心は荒み、その心を癒すべく領主様は多忙を極めておられます。今朝の事件に関わった、あなたは知っているはずだ、リオン・デルフィニウム殿」

リオンの眦がかすかに動いた。

「俺のことを知っているのか」

「あなたは有名人ですから。突然現れた旅人が、わが領地の誇りであり、警備兵隊長であるディプロをあつさりと打ち倒した。この噂

はあっという間に広まりました。今ではあなたを知らぬ者の方が少ないでしょう」

フリージアは驚愕した。

まさか、リオンがそこまで有名になっているとは思ってもよらなかったのだ。

それに比べ、リオンは平然としたもので、目の前の人物がどういう発言、あるいはどういう行動をとるのか静かに待っている。

「しかし、それは今、重要なことではないでしょう。魔物に襲撃されたさい、私は城を警備していたため、その場に立ちあえませんでした。そのときの状況を仲間より伝え聞いております。仲間を失い混乱した、私の仲間を助けてくださったとか。そのことには深く感謝しております。本当にありがとうございます」

フォールは深々と頭を下げた。

「しかし！ 先ほども言ったように、私の使命は領主様をお守りすることなのです！ あなたを領主様に合わせた結果、あなたの用件が領主様にとって重要ではなかった場合、領主様はあなたといった時間、無意味に業務を滞らせたことになってしまう。それは領主様にとって、そして私にとっても好ましいことではないのです。その上、あなたは礼を尽くさなかった。礼をもって接するのなら、私も礼をもって接しましょう。しかし、無礼をもって接するのなら、私も礼を尽くすことはないでしょう。もう一度お尋ねします。領主様には、なんとお伝えすればよろしいでしょうか？」

フォールの毅然とした態度に、もう一人の警備兵は感心したように見つめている。

その時、フリージアは肝を冷やしていた。

なぜなら、普通は毅然とした態度で接されれば、自然と居住まいを正すものだが、リオンなら二人を捻じ伏せて押し入る可能性も否定できないのだ。

フリージアが懸念そうに見つめるなか、リオンのとった行動は、フリージアにとって驚くべきものだった。

リオンは右手を胸の辺りに持つていくと、恭しく頭を下げた。

「申し訳ありません。この地を襲った悲劇に、心を痛めておられる領主様の心中をお察しすることもできず、そればかりか、荒んだ民心を癒すために、多忙を極めておられることへの配慮もできずに、私用に走つてしまったこと、お詫びの言葉もございません。我が無礼をお許してください」

フォールは眉をしかめた。

リオンの言動に不自然な点があったわけではない。

ただ、リオンの言葉と態度は丁寧ではあるのだが、丁寧であるというだけで、事務的といえるほど淡々と話していた。

そこに敬意など微塵もこめられておらず、敬意がこめられていない敬語ほど、腹が立つものはないのだ。

それでも、表面上は礼を尽くしているため、フォールは何も言えずに聞いていた。

「本来なら日を改めて非礼を詫びるのですが、どうしても今でなければならぬ私用なのです。度重なる無礼をお許してください」

「かまいません。用というのは何でしょう？」

リオンは頭を上げると、フォールを見据えた。

「私を傭兵として雇つて頂きたいのです」

「傭兵として……ですか？ 確かに、あなたの力は聞き及んでおります。戦力としては相当なものになるでしょう。おそらく、魔物が現れたためにそのようなことを言っているのですが、魔物が何日も連続して現れることは極稀なことです。あなた方には旅程がありません。旅程を延長してまで、ここにとどまる意味はあまりないように思えます。それに、私たちも領地の財源を無意味に使うことはできません。どうか、お引き取りください」

リオンは不敵に微笑んだ。

「あなたは私を試しておられるのか？ それとも、礼を尽くさなかつたことを根に持つておられるのか？ いや、それは今、どうでもいいことです。私も魔物が出たという理由だけで、傭兵になろう

と思うほど愚鈍なつもりはございません。今回の事件、人間が関わっている可能性がございました。」

フォールは怪訝そうに眉をひそめた。

「確かに、今回の件、人間が関わっている可能性があります。しかし、あなたはいつたいどうやってそのことを知りえたのですか？」

とたん、さつきまでただうなずいたりして聞いていただけのもう一人の警備兵が険しい表情になり、槍を構え、疑念と敵愾心をこめた視線をリオンに送った。

「そのことは、領主様や私たち警備兵、そして、魔物が襲撃してきたおり偶然その場に居合わせた少数の村人たちだけです。その村人たちには箱口令^{かんこうれい}を出しておりますゆえ、噂が広がったとは考えにくい」

フォールは厳然たる面持ちで、槍を構えた。

「私達を納得させるだけの理由を述べていただきたい。それができないと言うのなら、私達は、あなた方を魔物襲撃事件に関わった容疑者として拘束、および尋問しなければなりません」

フリージアはビクツと震えた。

フリージアは怯えた様子でリオンの裾をギュツと握り、リオンを見上げた。

だが、いまだ消えぬリオンの不敵な笑みは、フリージアを不安にさせ、二人の警備兵に強い警戒心を抱かせるものだった。

「どうも邪推しているようですね。わかりました。説明させていただきます」

リオンは淡々とした口調で説明を始めた。

「トロールと戦った場所ですが、不可解なことがありました」

「不可解なこと？　しかし、あの場所に不自然なものなどなかったと思いますか？」

「はい。確かに不自然なものはありませんでした。」

「なら、どうして不可解だと思ったのですか？」

「あの場所は、この領地の中心地に近かったですから」

雨脚が強くなる。

「仮に、トロールの群れがタール山脈から攻め込んできた想定した場合、必ず領地のはずれの方に住む村人が気付くはずです。トロールの足はあまり速くありません。発見した村人が警備兵に知らせに行つて、警備兵がトロールの元につくまでの間、トロールがまっすぐに領地に中心地に向かったとしても、中心地付近で戦闘になるとは考えにくい。空を飛べる魔物がトロールを運んできた、ということも考えてみたのですが、これは三つの理由から可能性がありません。まず一つめの理由ですが、飛行系の魔物の死骸を確認できませんでした。二つめは、トロールを運ぶだけ運んでどこかへ飛び去るとは考えにくい。そして三つめ、これは根本的なことですが、トロールほどの巨体を運べる魔物はそうそういるものではありません。以上の理由から、魔物が運んできたという可能性はなくなります」

リオンは垂れ下がってきた髪をかきあげた。

「残る可能性は、魔物が突如出現した。そんなことが可能なのは、召喚士などの特別な力を持った者、もしくは魔に属する、ヴァンパイアのように人間並みの知性を持つ者。しかし、魔に属する存在は太陽の光を嫌う傾向にあります。明け方にうるつくとは考えられない。したがって、人間が起こした事件であると推測しました」

「なるほど、聡明なお方だ。確かに、魔物は何者かの手によって召喚されました。しかし、まだ疑問があります。あなたは魔物や、召喚士といった職業に詳しいようですが、召喚士は魔物を呼び出すさい、魔法陣の展開と呪文詠唱が必要はず」

「ほう。召喚士について詳しいのですね」

「一般常識程度には。とにかくこの領地の中で、そのような不審な動きをする者がいれば、領民が必ず私たち警備兵に通報するでしょう。そうすれば、たとえトロールが呼び出されても、その人物を逃がすことなく捕らえ、無力化することができたはずです。相手が召喚士ではないからこそ、我々が手をこまねいているとは考えなかったのですか？」

「当然、そのことも考えました。ですから、私は推測を裏付けるために調査を行いました」

「その調査について、教えてくださいませんか？」

とたん、リオンは狡猾ともいえる笑みを浮かべ、皮肉った口調で言った。

「なに、簡単なことです。トロールと戦った場所の周辺の家々をたずねて回ったのです。親切にも、犯人と思われる人物の特徴を教えてくださいましたよ。『このことは誰にも言ってはならない』というお言葉つきで」

二人の警備兵は思わず苦笑した。

フォールは一瞬、リオンが嘘を言っているのかと思ったが、今までの理路整然とした説明を考えても、その可能性はないように感じられた。

そもそも、箝口令をしいても、いずれ秘密が漏洩するのは推測できていた。

フォールは警戒を解いて槍をおろし、続いてもう一人の警備兵も槍をおろした。

フォールは頭を下げた。

「わかりました。あなたを信じましょう。邪推してしまったこと、お詫びします」

「いえ、あなたが私を疑ったことは至極当然のことであり、謝る必要はありません。むしろ、この地を守る警備兵にふさわしい謹厳な姿勢でした」

「そう言ってくださると助かります。いまから、領主様にお伝えしてきますので、少々お待ちください」

フォールはもう一人の警備兵に視線で合図を送り、門を開けさせた。

「さて、まずは自己紹介しましょう。私はクオールド・セインバークと申します」

お辞儀をしながら自己紹介したのは、老齢で人のよさそうな笑みを浮かべた領主だ。

リオンもお辞儀をして答える。

「リオン・デルフィニウムです」

「フリージアと申します」

簡潔な自己紹介の後、それぞれソファーに腰掛けた。

雨に濡れたリオンたちを配慮してか暖炉が炊かれており、暖炉側のソファーに二人は座っている。

事務室だからか、取り立てて特徴のない簡素な部屋だ。

「何かお飲み物はありますか？」

「では、お言葉に甘えてコーヒーを」

「私は紅茶をお願いします」

領主は下女に飲み物を持って越させた後、下女をさがらせた。

二人とも持つてこられた飲み物をすすり、クオールドもコーヒーをすすった。

「これは、フィリアル山脈で採れるコーヒー豆を使っていますね」

「ほう、コーヒーについて詳しいんですね」

「好きなものですから」

フリージアはちよつと驚いてリオンを見た。

これまでリオンが自分の好みなど言ったことがなかったためだ。

リオンは何を食べても美味いとも不味いとも言わないので、そういう好みを知ることとは出来ないでいた。

確かによくコーヒーを飲んでいたが、それもほかに飲むものがないから飲んでいただけだろうという程度にしか考えていなかった。

一つリオンのことがわかって内心喜んでいるフリージアを尻目に、リオンはカップを下ろすと、少し神秘的な顔つきになった。

「さて、本題に入りましょう。単刀直入に伺います。私を傭兵として雇っていただけるのですか？」

クオールドは少し困ったような顔つきになった。

「そうですね……まず、あなた方が何を報酬として望んでいるのかということと、雇う期間をお聞かせ願いたい」

「報酬は金貨五枚。前金に金貨二枚と貰います。期間は一週間。その間、泊まれる宿の手配をお願いしたい」

「一週間の間に何もなかった場合はどうするのですか？」

「その時は、前金だけ貰って私たちはこの領地を出ます」

リオンは言い終わるとコーヒーをすすった。

クオールドは悩んでいるのか、コーヒーをすすると黙ってしまった。

沈黙が続くなか、窓の外から雨が降る音だけが聞こえる。

不意に、リオンが口を開いた。

「言い忘れていました。一つ条件があるのですが」

「何ですか？」

「犯人の生殺与奪権を私に与えてもらいたい」

クオールドは目を丸くした。

目の前にいるリオンという少年が、まさかこのような条件を提示してくるとは、夢にも思っていなかったからだ。

フリージアも驚いた様子だ。

「リオンさん、そんなこといけません！」

「黙っている」

「でも！」

「黙っている」

フリージアは口を噤^くんだ。

ドスのきいた低い声に、戦慄してしまったのだ。

クオールドも、得も言われぬ恐怖を感じていた。

クオールドは微笑を浮かべたが、口元が微かに引きつっている。

「それは……なぜそんなことを？」

「単純に気に食いません。だから殺します」

聞いた者がぞくぞくするほど、感情の欠片も感じられない冷たい

口調だった。

リオンは不敵な微笑を浮かべた。

「で、どうなさいますか？ 条件を呑んでくださるのですか？」

「……私としては、犯人の身柄を拘束し、拘置所へ送り、しかるべき罰を与えたいと思っていますのですが……」

「つまり、私の条件は呑めない？」

「……そうなります」

リオンは、交渉そのものがめんどつくさくなったのか、傍若無人にもソファーにもたれかかった。

「クオールドさん。あなたにとって犯人に罰を与えることは、さほど重要ではないはずだ」

「どういうことですか？」

「あなたにとって重要なことは、犯人が持っている力でしょう？」

クオールドは深くうなずいた。

「そうですね。瞬時に魔物を呼び出した宝石のようなもの。そんなものは聞いたことがありません。だからこそ、犯人を尋問し、力の正体を暴き、場合によっては国王陛下に報告しなければなりません」

「そうですね。つまり、力の正体を暴きさえすれば、犯人はどうでもいいということですね？」

「……さすがに、どうでもいいということはありませんが、尋問が終われば、処罰を検討し、拘置所へ送るだけです」

「なら、私がある場で尋問して必要な情報を聞きだせば、犯人を殺しても、なんら問題はありませんか」

クオールドは苦笑した。

「あなたが尋問するのですか？ しかし、尋問する側にもそれなりの覚悟が必要ですが、あなたにできるのですか？」

「当然、可能です。そうでなければ、このような提案を出したりはしませんよ」

クオールドは、また悩みだした。

返事を待つ間、リオンはコーヒースタマをすすって時間をつぶした。

リオンがコーヒーを飲み終わり、カップをテーブルに置いたその時、クォールドが口を開いた。

「わかりました。あなたを傭兵として雇わせていただきます」

「それは、私の条件を呑んでくださるということですね？」

「はい」

「では、犯人について、情報交換しましょう。もともと、私が知っていてあなたが知らないことがあるとは思えませんので、私が集めた情報を整理しながら説明します。すべて話し終えたとき、私が既知していないところがあれば教えていただきたい」

「わかりました」

リオンは深く腰掛けると、淡々と説明し始めた。

「犯人は、茶色でよれよれのフード付きのコートを着ていた。フードを目深にかぶっていたことと、声を誰も聞いていないため性別不明。宝石のようなものを使い、赤黒い光とともに魔物が現れた。ここまでが私が得た情報です。どこか間違いがあれば指摘していただきたい」

「いいえ、間違いはありませんよ。そして、私が知っていることもあなたが提示してくださった情報と同じぶんだけです」

「犯人について手がかりや目星は付いていませんか？」

「残念ですが、まったく」

「そうですね。では、一つ質問させていただきます。そして、その質問はクォールドさんにとって不愉快なものである可能性が高いと思われませんが、冷静に聞いていただきたい」

「たとえ私にとって不愉快であっても、犯人の手がかりにつながるかもしれないでしょう。お話ください」

「この領地の民で、何か不審な動きをしている人物がいるか、もしくはそういった噂が流れているということはありますか？」

突然、クォールドの目つきが鋭くなった。

先ほどまで温和な表情だったため、それは激変といえるほどの変化だった。

一気に緊張感が増した部屋で、フリージアは不安そうにリオンを見た。

依然として無表情をくずさないリオンは、ただクォールドを冷たく見つめている。

「それは、つまり私の領民を疑っているということですか？」

クォールドは声こそ荒げていないものの、口調は厳しくなっていた。

リオンはただ、口元にうすい冷笑を浮かべ、それを受け止めた。

「前もって警告したのですが、やはり冷静には受け止めてくれませんでしたか」

「自分の領民を疑われて、冷静でいられるわけないでしょう！」

ととうと声を荒げて叫んだクォールドを、リオンはどこか見下すような視線を送っている。

「クォールドさん。あなたは自分の領民をまったく疑ってないのですか？」

「当然でしょう！」

「いいえ。嘘ですね」

リオンの断言。

「何故そう思うのか、お聞かせいただきたい」

「何、簡単なことです。犯人がわざわざ顔を隠していたということは、見られては困るということ。そして、顔がばれて困るのは、この領地の住民くらいです。こんな簡単なことに、領主であるあなたが気付かないはずがない。ただ、あなたは疑いたくなかっただけでしょう？ だから、あなたはこの可能性を無意識的に排除した」

容赦ないほど淡々とした言い方に、クォールドの眼光は鋭くなる。三度訪れた静寂は、不穏な空気に包まれる形となった。

薪が爆ぜる音が響く。

クォールドの表情に徐々に影が差していった。

ととうと俯いてしまったクォールドは、苦しそうに声を振り絞った。

「魔の者の仕業である可能性はないのですか？ 太陽は雲に遮られていますし、フードをかぶっていたのは、わずかな太陽光も浴びないためであるということも考えられませんか？」

「まったくないわけではないですが、可能性は低いでしょう。もし魔の者であつたなら、トロールを呼び出した後、自分も戦闘に参加しているでしょうから」

クオールドの微かな希望は残酷に打ち砕かれた。

すべてを言い終えたりオンは静かに、冷酷に返事を待った。

やがて、クオールドは重々しく口を開いた。

「……残念ですが、不審な動きをしている領民の噂や情報はありません。もし、不審な動きをしている領民がいれば、嫌でも私の耳に入りますから」

「そうですか。では、私はこれで失礼します。これ以上ここにいる意味はないで。とりあえず、これから泊まることになる宿を教えてくださいだきたいのですが」

思いやりの欠片もなく、ただ用件だけを伝えたりオンを見て、フリージアは怒りがこみ上げてくるのを感じた。

フリージアは何か言おうとしたが、その前にクオールドが口を開いた。

「わかりました。警備兵たちが使っている宿舎に空いている部屋があるのですが、そこでもよろしいですか？」

「はい」

リオンは立ち上がり、クオールドは顔を上げた。

クオールドの表情を見たフリージアはやるせない気持ちになった。クオールドの目はくぼんでおり、痛々しい微笑を浮かべている。

それは、自分にとって最もあつてほしくないことを突きつけられた悲しみをよく表していた。

フリージアは胸を締め付けられているような苦しさを感じた。

ふと、フリージアはリオンを見上げた。

リオンの横顔は無表情で、目的を果たしたことの達成感すら感じ

られない。

少なくとも、クオールドの痛みなど少しも感じていないことは、フリージアにもわかった。

事実、リオンにとって他人の痛みなどどうでもよく、今回のことも、道端にあった邪魔な小石を蹴飛ばしたくらいにしか考えていない。

フリージアは視線を移して、クオールドを見た。

何か謝罪の言葉を搜したが、結局何も見つからなかった。

落ち込んでしまったフリージアを知ってか知らずか、クオールドはやさしく訊ねた。

「あなたも警備兵が使っている宿舎でよろしいですか？ それとも別に宿を手配しましょうか？」

「いえ、私も警備兵の皆さんが使っている宿舎でかまいません」

「わかりました」

クオールドはテーブルの上にある鐘を手にとると、軽く振って鳴らした。

すると、すぐに下女が部屋に入ってきた。

「宿舎の空き部屋に彼らを案内してくれ」

「かしこまりました。では、私についてきてください」

フリージアは深々と頭を下げた。

自分にできる精一杯の謝罪として。

降り止まない雨の中、ディプロは中庭の中央で空を睨み、たたずんでいた。

中庭には多くの花壇があり、様々な種類の、色とりどりの花々が咲き誇っている。

しかし、空の涙に煌く花弁はどこか物悲しげに見える。

「何でこんなことになっちまったんだろうな、ブロード」

空に投げかけた言葉はむなしく吸い込まれた。

返ってこない返答に視線をおろすと、リオンが向こうから歩いてきていた。

まるで何も感じていないように無表情なリオンに、ディプロは怒りがこみ上げてきた。

矢も楯もたまらずリオンに歩み寄り、荒々しく胸倉をつかみ上げた。

リオンはまるで動じずに、白眼視するだけだ。

「何のつもりだ？」

「それは俺の台詞だ！ いきなり傭兵になって、犯人を殺す権利だと？ 何をたくらんでいるんだ！？」

「何もたくらんでなどいない。ただ気に食わないから殺す。それだけだ」

ディプロは射殺すように睨み付けている。

ディプロは振り払うようにして手を離し、声だけは静かに、威圧的に言った。

「やつを殺すのは俺だ。お前には殺させない」

「ほう。お前は契約を破るというのか？」

「そんなもの、俺には関係ない。たとえ領主様がなんと言おうと、復讐を果たすのは俺だ」

とたん、リオンは鼻で笑った。

ディプロは声を荒げる。

「何がおかしい！」

「くだらないと思ってな」

「くだらないだと？」

「死んだ者に、死んだ過去に突き動かされ、現在を歪めるのはくだらないとしか言いようがない。いや、愚かと言ったほうが正しいか」
ディプロの目に殺意が宿った。

剣を抜き、リオンの喉元に突きつける。

「お前に何がわかる！ 俺の痛みが、俺の悲しみが、俺の苦しみが

「お前にわかるのか!？」

「理解できるわけないだろう? 理解するつもりはない、理解したくもない」

ディプロの体が怒りで震える。

「今にも斬りかかりそうなディプロに、更なる追撃を加える。」

「それに、こんな状況を望んだのはお前自身ではないのか?」

「なんだと!？」

「お前は腕に覚えがあるようだが、この領地を退屈に感じたことはなかったのか? 自分の腕を試せない、平和で何も起こらないこの領地に辟易した事はなかったのか? 自分の腕を存分に振るえる混沌を望んだことはなかったのか?」

「そ、それは……」

ディプロはたじろぎ、剣をおろした。

「やはりな。お前は混沌を望んだ。そして、やってきた混沌はお前の望まぬものだった。そしてお前は平和を崩されたことを自分勝手に嘆いている。愚かなことだ」

ディプロは歯が砕けんばかりに歯を食いしばった。

怒りで顔が歪んでいるが、先ほどのような迫力はまるで感じられなかった。

「お前が俺に突っかかってこなければ、あの男は死を免れたかもしれない。お前が自分の責任を忘れ、感情にまかせて私情に走らなければ、この結果とはまた違うものになったかもしれない。」

リオンは嘲るように鼻を鳴らした。

「あの男も哀れだな。こんな無能な上官に従わなければならず、結果として自身の死を招いた。いや、こんな上官に仕えていた時点であの男も馬鹿だったのだろうな」

「ブロードを馬鹿にするのか!？」

「事実を言うことが馬鹿にするということならそうなるな」

ディプロに蓄積されていた様々な感情が一気に爆発した。

剣を振りかぶり、叫ぶ。

「はあああああああ！！」

豪快に振り下ろされたロングソードは、リオンがわずかに横にずれただけでむなく空を斬った。

リオンは一步踏み込むと、みぞおちに強烈な一撃を入れた。

ディプロは崩れ落ちるようにつずくまり、忌々しげにリオンを見上げた。

リオンは冷たく見下ろしている。

「以前にも、似た場面があったな」

リオンは初めてディプロと会った日のことを言っているのだ。

リオンは身を翻して背を向けた。

「怒りに囚われれば、剣の動きが単調になる。感情などくだらない」

リオンは歩き出し、建物の中に入っていた。

残されたディプロを、雨だけが包み込んだ。

痛みも、悲しみも、苦しみも共に。

フリージアは貸し出された部屋のベッドに座っていた。

警備兵の宿舎だけあって、部屋の中はとても簡素だ。

二段式のベッドが二つに、正方形のテーブルが一つ、そのテーブルの上に手燭が一つ、背もたれ付きの椅子が四つあるだけだ。

フリージアはなんとなく眠れなかったので、立ち上がって窓の前まで行った。

窓から見える景色は前庭の一部だが、その光景はとても美しく見えた。

降り続いていた雨もすでに小雨となり、途切れた雲の間から差し込む月明かりに照らされた花々は冷たくも温かさのある輝きを放つ。幻想的な光景に恍惚としそうになったが、胸に引っかかる何かのせいで、見とれ続けて入れなかった。

フリージアは窓から離れ、手燭を手に取り部屋を出た。

フリージアは、どうしてもリオンに訊きたい事があったのだ。それに、もう一つやらなければならなかったことがあった。

フリージアは、ディプロのことで罵倒してしまったあの日から、リオンとまともに会話をしていないのだ。

なんとか仲直りしようと、何度も謝ろうとしてきたが、不思議とタイミングが合わなかったせいで、今に至るわけだ。

早く謝らなければと、手燭の灯りを頼りに廊下を進む。

「誰だ!？」

「きゃあ!？」

突然の声にビックリしてフリージアはしりもちをついた。

手燭の前に突き出して目の前を照らすと、そこにいたのはロングソードを構えたフォールだった。

フォールは険しい表情をしていたが、すぐに温和な表情に戻った。

「申し訳ありません。侵入者かと思ひまして、とんだ勘違いでしたね。驚かせてしまったようですね。大丈夫ですか？」

「あつ……はい、大丈夫です」

「よかった。立てますか？」

そう言つて手を差し出そうとした刹那、背筋を冷たいものが流れた。

振り返ると、そこには闇を纏つたりオンがいた。

そして、手に持ったロングソードはフォールの首筋に当てられている。

「なぜ、お前は剣を抜いている？」

フォールの心臓がうねる。

闇を映したりオンの瞳は鋭い光を帯びている。

返答を誤れば間違いなく死ぬ。

そう確信できるほどの殺意を全身に帯びていた。

フォールが答えようと思ったその時、背後からフリージアが先に答えた。

「違つんです！ フォールさんは、私を侵入者と勘違いしてしまっ

ただけなのです！ 勘違いされたことも謝ってくださいました。だから、リオンさん、剣を収めてください！」

フリージアが必死に捲くし立てるも空しく、リオンから殺気が消えることはなかった。

フォールの息づかいが荒くなる。

額から頬を伝って嫌な汗が流れ落ちる。

リオンは呟いた。

「怪我はなかったか？」

「えっ？ …… はい」

「そうか……」

リオンから殺気が消え、ロングソードが収められた。

フォールにのしかかっていた死の重圧が消え、崩れそうになった。いまだ治まらない動悸に、冷や汗が流れ落ちる。

目の前にいるリオンは初めて見たときと変わらない、どこか不敵な姿だ。

だが、先ほどの剣を突きつけていたときのリオンは、異形の者のように見えた。

リオンはフォールに背を向けると、そのまま歩き出した。

フリージアは慌てて立ち上がり、フォールに一言謝罪すると、リオンを追いかけた。

「待ってください、リオンさん」

二人の後姿を見ていたフォールは震える声で呟いた。

「彼は…… 本当に人なのか……？」

「あの、さっきはありがとうございました」
「何のことだ？」

「助けに来てくれたのでしょうか？」

「……お前の悲鳴が聞こえたからな」

フリージアは、助けに来てくれたという事実がうれしくてにんまり笑った。

リオンの部屋に入る前、部屋の扉は開けっ放しになり、部屋に入れば、リオンが何か書いていたのだろう、書きかけの書物がそのままになって放置され、漆黒の羽でできたペンが無造作に机の上を転がっていた。

それは、フリージアの悲鳴を聞きつけて、急いで飛び出したということに他ならないからだ。

リオンは椅子に座り、机の上を転がるペンを手に取った。

ペンは滑らかに書物の上をすべり、真っ白な空間を黒に染めていく。

テーブルの上にある手燭の灯りがリオンの顔に深い陰影をつける。「いつまでそうやって突っ立っているつもりだ？ わざわざ俺の部屋まで来たからには用件があるんだろう？」

フリージアは、喜びのあまり肝心なことをすっかり失念していたことによく気が付いた。

一度深く深呼吸をして、覚悟を決めた。

「あの、あの時はあんなことを言ってしまったてごめんなさい」

「何のことだ？」

リオンは何のことで謝られているのか本当に気付いていないようなので、フリージアは詳細にあの日のことを説明した。

リオンはペンの動きを止め、少し呆れたようにフリージアを見やる。

「そんなことを今まで気にしていたのか」

「そんなことじゃないです。私が言ったことは本当にひどいことでした。だから、ごめんなさい」

フリージアは深々と頭を下げた。

リオンは無表情に見つめていたが、再び書物に目をむけ、ペンを

滑らせる。

「俺は気にしていない。だから謝る必要などない」

「でも……」

「必要ないと言っている。これ以上謝られてもくどいだけだ」

フリージアは頭を上げた。

ずいぶん乱暴な言い方だったが、いつもの冷たさはまるで感じられなかった。

そのことに、フリージアは内心驚いてリオンをまじまじと見た。

温かい声というには小さすぎる変化だが、気のせいで済ますには大きすぎる変化だった。

とにかく、これで一つ目の用件が終わった。

後は、もう一つ用件を済ませればいいだけの話なのだが、せつかなのでもう少し会話をしたいと思った。

そこで、話題を考えながらキョロキョロとあたりを見渡すと、あるものがないことに気付いた。

「あの、斧はどうしたのですか？　そういえば、ここに来るとき持っていないませんでしたか」

「あの斧なら鍛冶屋に売った」

「売ったのですか？」

リオンは懷から巾着を取り出した。

「この中に、売って得た金が入っている」

「もしかして、売るためだけに持ってきたのですか？」

「当然だ。あの斧は無駄に装飾が豪華だったからな。資金は潤沢なほうが良い」

リオンは巾着を懷に入れ直した。

「でも、資金なら教会から給付された布教金があるじゃないですか」

「あれは布教の旅に必要な最低限の分しかないだろう。お前はそれでいいのかもしれないが、俺には金が必要になるときがある」

「そう……ですか」

会話が途切れてしまったフリージアは、とりあえずリオンのそば

まで行つた。

近くで見ると、リオンが何か書いている本はかなりの分厚さがあった。

フリージアは開かれたままの本を覗き込みながら言った。

「何を書いているのですか？」

「日記だ」

フリージアは慌てて後ろに飛びのいた。

「す、すみません！ 日記だとは思わなくて……」

「かまわない。見られて困りはしないからな」

「でも、人の日記を見るのはよくないことだと思います。だから、その……ごめんなさい」

フリージアは深々と頭を下げた。

リオンは少しの間フリージアをジッと見ていたが、視線を本に移すと、最後の行を書き終え、本を閉じた。

「故意にやったわけではないだろう。なら、仕方のないことだ。謝る必要はない」

フリージアは頭を上げた。

またしても、いつも通りの冷たさを感じない声色。

リオンはいつも通りの無表情だが、いつも通りの冷酷さはまるで感じられない。

リオンさんなりに気遣ってくれたのかな？

そんな風に思うと、心があったかくなつたような気がした。

「でも、ちよつとビックリしました。リオンさん、日記を書いているんですね」

「昔からの習慣だ。書かないと一日が終わつた気がしない」

フリージアは微笑んだ。

今までリオンの人間らしいところを見たことがなかったため、安心したのだ。

フリージアはポツリと呟いた。

「私も書こうかな、日記」

とても温かで穏やかな時間がながれる。

だが、ずっと浸っているわけにはいかなかった。

フリージアは、リオンの訊かなければならないことがあり、そのために会いに来たのだ。

フリージアは神妙な面持ちで訊く。

「もし、この事件の犯人が現れたら……殺すのですか？」

蠟燭の炎が揺れた。

リオンの顔に冷酷さが戻り、室温が一気に冷えたような錯覚を覚えた。

「当然だ。領主と交渉したときに言ったはずだ」

「どうして殺すのですか？」

「気にいらないからだ」

とても単純で冷酷な答えにフリージアは困惑した。

「本当に、気にいらないという理由だけで殺すつもりなのですか？」

リオンは、フリージアを見つめた。

「……俺の目的である可能性がある」

「リオンの目的？」

「復讐だ」

リオンは小さく自嘲気味に笑った。

「くだらないと思うだろう？」

「いえ……くだらないなんて思いません。ただ……」

フリージアは言葉を濁したが、最後まで自分の意思を言い切った。
「私は復讐なんてよくないと思います。憎しみからは憎しみしか生み出されません。どんな理由があろうと、人を殺すのは、私は賛成できません」

フリージアを見つめていたリオンは立ち上がり、右手をフリージアに向かって伸ばす。

フリージアはビクツと震えて目を閉じた。

少して、フリージアは自分の頬に触れられている感触がして目を開けた。

リオンは右手を、割れ物を扱うかのようにやさしく添えていた。
「お前の目は美しい。純粹で、穢れを知らない無垢なる者の瞳だ」
蠟燭の炎に揺らぐリオンの瞳からは温かさも冷たさも感じられない。
い。

「だが、それは所詮、無知からくるものだ。絶望を知ってなお、お前は変わらずにいられるのか？」

フリージアは何も答えられなかった。

フリージアの瞳から涙が零れ落ちる。

「あなたは……どうしてそんな目をしているのですか？」

吸い込まれそうな深い虚無と闇を湛えているリオンの瞳。

人に無くてはならないはずの何かが欠落している瞳。

「あなたは……どんな絶望を背負っているのですか？」

「俺は……」

言いかけて、背を向けた。

「くだらないことを話した。用件は終わったのだろうか？　ならこれ以上話すことはない」

「リオンさん……」

「俺はもう寝る。お前も部屋に戻れ」

「……わかりました。おやすみなさい」

扉が閉まる音が静かに響いた。

「本当に来ると思いますか？　リオンさん」

「まだなんとも言えません。間を置かずに来るかもしれませんが、油断させるために数日置いてから来る可能性もあります。どちらにせよ、一週間以内に来る可能性が高いと思います」

「そうですか……」

クオールドは深いため息をついた。

リオンはゆつくりとした動作でコーヒーを啜る。

隣で座っているフリージアは何か思いつめていた。

それぞれが物思いにふけり、深い沈黙と静寂が訪れた。

だが、それは勢いよく開かれた扉の音に破られた。

皆一様に扉のほうを見ると、息を切らした一人の警備兵がそこに立っていた。

その切迫した表情から、物事の緊急性が見て取れる。

「なにごとだ!？」

「領主様、魔物が一直線にこの城目指して――」

警備兵の声は、すさまじい轟音によって掻き消された。

リオンとクオールドは窓から外をのぞいた。

眼下に見える光景は、吹き飛ばされた正門と破壊された塀。

そして、五体のミノタウロスと茶色のコートにフードを目深にかぶった人間。

苦々しげな表情のクオールドと対照的に、リオンは口元に笑みをこぼしている。

「くそっ！ まさか本当に来るとは……！ リ、リオンさん!？」

クオールドから驚愕の声が漏れた。

リオンは窓を開け、窓枠に足を掛けていた。

「一体何を……」

クオールドが言い終わる前に、リオンは窓から飛び降りた。

クオールドの口から悲鳴に近い声が漏れ、窓から身を乗り出して見下ろした。

リオンは華麗に着地を決め、平然と立っていた。

一安心したクオールドは部屋を出ようとしたが、警備兵に引き止められた。

「お待ちください！ どこへ行くつもりですか？」

「決まっている！ 我が領地を脅かさんとする者がそこにいるんだ！ 私も剣を持って戦う！」

「そんな、無茶を言わないでください！ 領主様にもしものことがあれば、誰がこの領地を治めるというのですか！？ お願いします。どうかご自重ください」

「しかし……！」

「クオールドさん」

フリージアが

「感情に流されてはダメです。きっと、今クオールドさんが出て、どうにもならないと思います」

「だからといって、警備兵たちを送り出して、自分だけ安全な場所で傍観するなど我慢ならない！ それに、先程も言ったが私は領主としての責任を果たさなければならぬんだ！」

「いいかげんになさい！」

厳しい叱責だった。

「あなたの仕事は剣を持って戦うことではないでしょう。この事態を見届けた後、事後処理をするのがあなたの責任です。あなたが剣を持って戦場に出て、万一にでも死んでしまうようなことがあれば、それこそ責任を果たすことはできないでしょう。それに、あなたが戦場に出れば、警備兵さんたちはあなたを守りながら戦わなくてはならなくなります」

フリージアは祈るように胸の前で手を組んだ。

「私は、守りながら戦うことの難しさを知っています。だから……」
真っ直ぐにフリージアを見つめていたクオールドは、ゆっくりとソファアに腰掛けた。

「……あなたの言っていることが正しいようです。いや、お恥ずかしい。この歳になって取り乱すとは。お前にも迷惑をかけた。行ってくれ」

あとの言葉は、心配そうに見ていた警備兵に言ったものだ。

警備兵はうなずくと、走って部屋を出て行った。

クオールドは

「しかし……憎悪というものは簡単に消し去ることが難しいようで

す。今、私は、自己満足の復讐のために、全ての責任を放棄して剣を取りたいという衝動に駆られています」

不安そうに見つめているフリージアに、クオールドは力なく微笑んだ。

「大丈夫です。あなたの言ったように、私は私の責任を果たします」フリージアはほっとして微笑んだ。

瞬間、怒号と咆哮、続いて鋭い金属音と地響きが轟いた。

フリージアはクオールドに頭を下げると、大急ぎで部屋を飛び出した。

クオールドはやつれた笑みを浮かべた。

「あなたは……戦う力が無くても行ってしまうのですね」

嫌味ではなく、ただ優しい声だった。

フリージアは城内の廊下を必死に走った。

自分に何が出来てもないのはフリージア自身が一番わかってはいたが、それでも行かなければという、一種の強迫観念に駆られて、無我夢中で走った。

途中、あわてるあまり、窓の外を不安げにちらちらと覗き見る下男下女に何度もぶつかりそうになったが、ついに前庭に通じる扉が視界に入った。

わりと広い城内を必死に走ったせいで息が切れていたが、さらに足に力をいれ、速度を上げる。

とうとう扉が目前に近づき、フリージアは勢いに任せて扉を開いた。

第一章：6 復讐者（後書き）

Lion's diary

本文より一部抜粋。

人は愚かにも混沌を望む。

平和な日常を退屈と思い、何かが起きることを期待する。

平和な日常を当然のように享受しながら。

その何気ない日常が、いかに危うい均衡の元に保たれているかも知らずに。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0294f/>

光と闇

2010年10月9日02時22分発行